

---

# ピッチに降り立つキセキ

厨王

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ピッチに降り立つキセキ

### 【Nコード】

N0817H

### 【作者名】

厨王

### 【あらすじ】

日本を変える為、サッカーの本場イングランドから来日した大石<sup>おお</sup>いしみげる未華瑠。一長一短の能力を持つ仲間や、監督、マネージャーと共に全国優勝を目指す青春物語です。サッカーにあまり詳しくない人でも分かるように心がけて書いてありますので、是非お読み下さい。

## キセキの始まり（前書き）

高校生の友情や恋愛を書く小説は初めてですが、なんとか頑張っていきたいと思います。よろしく願います

## キセキの始まり

4月4日、世間が入社や入学で慌ただしい頃、一人の男が来日した。

「ここが日本」

長く綺麗な茶髪、日本人にはない白さをもった肌、茶色の目。

すらつと長い足と端正な顔立ちはモデルのようだ。

彼のは国籍こそ日本だが父親は英系日本人、母親は仏系スペインという国際色豊かな両親を持つ。

この物語は、そんな彼  
おおいし みげる 大石未華瑠が日本の小さな高校で起こした、大きなキセキの物語。

「大石ー!!」

どこかから大きな声がする。

「こつちこつち!!」

その声の方を見ると

「絵実香」

くぼ えみか 久保絵実香。

大石が小学生までイングランドで一緒だった幼なじみ。

肩をゆうに越す長い黒髪に黒い目、170センチとやや高めの身長で、知性を感じさせる顔は幼なじみと久しぶりの再会でゆるんでいる。

大石が久保の方に歩き、久保の前に行くと久保が大石に抱き着き、彼の頬にキスをした。

「お、おい！」

大石が白い肌を赤く染め、久保はいたずらっぽく舌を出す。

「へへっ」

「へへっ、じゃねえよ！」

「だって、久しぶりだし」

「全然理由になってないよね、キスした理由になってないよね」

「じゃ、鶴巻（つるまき）も待ってるから、早く行こっ！」

「無視かよ！」

久保は大石の手を掴み、走り出した。

「ちょ、ま、走るなー！」

「久しぶりだな、大石」

鶴巻は空港の外にいた。

つるまきりゅうが  
鶴巻龍我。

久保と同様にイングランドで小学生まで大石と一緒にだった幼なじみ。

黒い髪に黒い目。

180センチの身長もさることながら、日焼けした肌と筋肉質な体で独特な威圧感を放っているが、滅多にいないほどの美男子である。

「4年ぶりだな　相変わらず、なんだな」

大石はなぜか少し複雑な表情になる。

「変わらないよ、4年くらいじゃ。前も言っただろ」

鶴巻は表情が少し暗くなった。

少し嫌な雰囲気になる。

「早く行こ！」

そんな空気に耐え切れなくなったのか、久保は大石と鶴巻の手を取り、タクシー乗り場まで連れて行った。

二日後

大石は今日からかながわていっとうちゅうがっこう神奈川私立唐冲高校に編入することになっている。

唐冲高校は中高一貫の学校だが、編入もあり、人数はクラス毎にはらつきがある。

入学の手続きはほとんど鶴巻と久保がしてくれている。

そして今、始業式が終わり、大石は教室で紹介される直前だ。

「それじゃあ、大石君自己紹介を」

教師の声に促され、大石が教壇に立つと制服である水色のワイシャツにブレザーを着ている男子と、男子と同じワイシャツ、ブレザーで、チェックのスカートを履いた女子の視線は全部大石に集まる。

教壇に立つと全員こっちを見ているのが分かる。

「大石未華瑠です。イングランドから来ました。これからよろしくお願いします」

礼をして空いてる席を捜す。

「ここ開いてるよ」

席の一番後ろの背の高い、黒髪を後ろで束ねた女が隣の席を指して言う。

大石は女の言う通りに、その女の隣に行った。

「よろしくね、未華瑠君」

「大石でいいよ　あなたの名前は？」

「志賀早百合。しがさゆり早百合でいいよ、大石」

早百合が微笑む。

早百合の身長は大石より少し低いくらいで、180センチくらいはありそうだ。

黒い目は澄んでいて、赤みを帯びた唇が魅力的だ。

「なーにデレデレしてんのさ」

ちょっと可愛い、なんて思っていると早百合の席の前に座っていた、黒髪で160センチくらいのくりつとした目が特徴的な少年がこちらを振り返って言うてきた。

カッコイイ、というよりも少女のような可愛らしく、母性本能をくすぐりそうな顔だ。

どこことなくのんびりとした雰囲気をかもしている。

「別に」

「照れちゃてゝシャイなんだね」



少年がニコニコと笑う。

「じゃあ出席とるよ」

担任がそう言ったからか、少年は前を向き直した。

朝のホームルームが終わると、怒涛の質問攻めが待っていた。

大石が一つ一つなるべく丁寧に答えていく。

それは休み時間ごとに続き

「起立、礼」

「ありがとうございました」

いつのまにか一日が終わってた。

大石が机に突っ伏してると、早百合が微笑みながら話しかけてきた。

「お疲れ様」

「ありがとう」

大石が机に突っ伏したまま答える。

「ところで、放課後どうするの？ 学校案内しようか？」

「いや 部活」

大石がそう言っていると早百合は少し驚く。

帰国子女の大石がいきなり部活をする、とは思わなかったのかもしれない。

「へえ 何部？」

「サッカー部。イングランドじゃずっとサッカーやってきたしね」

「そっか」

早百合は少し間をあけた。

顔から何故か笑みは消えていた。

その間は何だよ、と大石が少し心配になっていると、早百合が話を続けた。

「じゃ木村に案内してもらいなよ」

「誰？」

「俺だよ」

前にいた少年が間髪いれずに答える。

「俺の名前は木村瑠璃（きむら るり）。よろしくね」

木村が左手を出す。

「ああ よろしく」

大石が右手を出すと木村がその手を掴む。

「じゃ行きますか」

木村がそのまま走りだす。

「ちょ、待てって！」

（木村<sup>こいつ</sup>なにげに足速い）

木村はある部屋の前で止まった。

「ここがサッカー部の部室だよ」

「ただの更衣室だろ」

そう、そこは体育館の更衣室だった。

「更衣室兼部室だよ」

木村がそう言いながら中に入ろうとしたが、更衣室兼部室から出て来た、180センチ前半くらいの身長、黒い目で赤みがかった黒髪を持つ男が大石達の前に立ち木村の肩を掴む。

男の腕は太く、小さな木村の肩を潰してしまいそうだ。

「おい、部外者を入れるつもりか」

ドスの効いた低い声がした。

男が冷たい眼でこっちを見ていた。

「“部外者”はひどいんじゃないの、北条。今日からチームメイトなんだから」

木村が北条という男にのほほんと話し掛ける。

「俺は 認めてないんだよ、コイツも 阿部達もな」

北条はそういうと木村の肩を離し、部室兼更衣室の中に入って行った。

「アイツとなんかあったのか？」

俺は木村に質問する。

「ま、色々とあってね」

木村はそう言っただけで更衣室兼部室に入ってしまった。

更衣室兼部室の中には、サッカー部員の荷物がごちゃっと置いてあ

った。

「汚いでしょ」

木村は笑いながらそう言うが、はっきり言って笑って済むレベルではないくらい汚い。

「さっさと着替えないと練習遅れるよ」

木村はすぐに着替えだす。

「着替えるもなにも 服これだけなんだけど。練習服とかないの？」

大石が自分の制服を指して言う。

「じゃあこれ着て」

木村が手渡したのは、床に置いてあった「永田」と名前が書かれた体操着だった。

「誰の？」

「チームメイトだよ」

木村が練習着であろう、紺色一色のシャツに、白いパンツに着替え終わっていた。

「早く着替え終わないと練習始まるよ」

「分かったよ」

大石は渋々着替えだした。

意外とサイズはピッタシで、動きやすかった。

着替え終わると、木村がグラウンドに連れてってくれた。

グラウンドでは、もうすでに練習が始まっていた。

「遅い」

木村に聞こえるか聞こえないかぐらいの小さな声で最初に話しかけたのは、170センチくらいでかなり痩せ型の男。

頭にバンダナを巻いていて、まるで海賊のようだ。

後ろからまとめきれなかった髪が飛び出している。

髪はかなり長いようで、バンダナを外せば目は前髪で隠されてしまっただろう。

「さっさとアップしてきな」

北条が怒鳴るように大石達に言った。

「おーけー」

木村はそう言うと大石達の腕を掴んで走りだした。

「あんまり気にしないでね」

木村が走りながら小さな声で話しかけてきた。

「あの男のことか？　気にしないつつうか　　何であんな機嫌悪いんだ？」

「嫌いなんだよね」

「何が？」

「大石みたいに途中から加入した人ゝ北条だけじゃなくて中等部からいた奴はたいていそうだよ」

「何でだよ」

「教えてあげるよゝこのチームのことゝそれから　　何で大石をこのチームに呼んだかってことを」

木村が子供のように微笑んだ。

## 理由

「中等部の時、あいつらがめっちゃ尊敬してる鈴木良太すずきりょうたっていう監督が居たんだよ。まあ「居た」ってか今も中等部にいるけど」

「尊敬？」

「唐冲ってチームは個性豊かな選手達で構成されてるんだよ」

「ああ、日本人は個性ってやつを嫌うんだっけか」

「そうだよ。スポーツは教育を映す鏡だからね。『日本』という国なんだよ。『平等』や『普通』が評価される国なんだ」

木村が苦笑いする。

「でも鈴木監督は個性を活かしたチーム作りをしてくれたのさ」

「それで？」

「そのサッカーは楽しかったよ。でもあんまり勝てなかったんだ。いったん劣勢になると修正出来なかったんだよね」

木村の走るペースが少し落ちる。

「鈴木監督は育成に特化した監督で、試合を見る目には欠けてたんだよね」

「ふうん」



「ま、それはそれでよかったんだけど。高校に上がって問題が起きたんだよね」

木村の顔が険しくなる。

「高校になってからジュニアユースからユースに昇格出来なかった選手がチームに入ったんだよね。あ、ジュニアユースは中学生がユースは高校生が所属するプロの下部組織だよ。ざっくりとしてるでしょ」

「日本にも下部組織ってあるんだ」

「あるよ。日本の場合ほとんどのチームが大多数の選手をジュニアユースからユースに昇格させるんだけどね」

「それで？」

「最初からいた奴らはユースから来た奴らの力を使わずに勝利しようとしたんだよね。それにプラスして監督の力不足もあってチームが全然上手く行かなかったんだ。なんとかしようと思って方法を探してたら大石が日本に帰って来るって久保に聞いたんだ」

「俺のこと、知ってたのか？」

「たまたまね。前にインターネットのニュースに名前出てたって久保に聞いたんだよ。日本ではそんなに有名じゃないよ」

木村は全く悪びれもせず、屈託のない笑顔で言い放つ。

「あ、そう」

「そこで大石に頼みがあるんだよ」

「頼み？　なんとかしてほしいってこと？」

「当たり前」

木村が笑う。

「頼んだよ。大石なら出来るでしょ？　イングランドで弱小チームを強豪にした、『奇跡の男』なんだから」

木村が微笑みながら大石の顔を覗く。

「まあ、そのために来たようなもんだから　いいけどね」

その時、ちょうど1周終わった。

「よし、終わり」

木村が準備運動を始める。

「まだ1周しかしてないけど」

「大石はなんで唐沖に来たの？」

「俺の話スルーかよ」

大石はそう言いながら準備運動を始めた。

「大石なら他のチームからも声がかかったでしょう？　いくら認知度低くてもサッカー関係者なら何人かは知ってるはずなのに」

「お前軽くヒドイこと言ってるからね、心にナイフ突き立ててるからね」

「教えてよ」

大石は何を言っても無駄だと思ったからか、一つため息をつくと話始めた。

「初めから計画してたことだから」

「？」

「俺が初めて日本サッカーを知ったのは、5歳の時だ。たまたま親父の友達が持って来たビデオに日本のサッカーの試合のビデオが混ざってた。プロの試合かアマチュアの試合かは忘れてたけど　単純につまらなかったよ。スリリングさに欠けた試合だった」

「日本に来ようと思ったのはその時から」

「いや、その時は単純におもしろくないなって思っただけ。実際に計画を立て始めたのは6歳の時、親父に日本から15歳以下の代表コーチ就任の要請の話が来た時だ。」

「大石の父親ってサッカーのコーチなの？」

「その時はイングランドでコーチしてた。元プロ選手なんだよ。そ

んなに活躍しなかったし、すぐに辞めちゃったからほとんどの人が知らないだろうけど」

「へ」

「その時の話を聞いてたんだ。親父に依頼されたのは選手を育てることだった。でも理由は知らないけど親父は断ったんだよね。だから俺が代わりにやろうと、あのつまらない試合を変えようと思った。けどあの試合だけで日本のサッカーをつまらないサッカーだと決めるわけにはいかなから情報を集めた。親父の友達に頼んで日本のプロとアマチュアの試合を何十試合かテープに撮って来てもらった。」

「何十試合？」

木村が驚く。

「一試合じゃわからないじゃん。まあテープの試合は5歳の時見た試合とあまり変わらなかったんだけどね。どのチームも同じような作戦で同じような選手しかいなかった。しかもその人が送ってくれた手紙には日本のサッカーに対する国民性について書いてあった」

「国民性？」

「『個性を嫌う』、『模範を提示すると盲目的に突っ走る』、『リスクをとりたがらない』、『心配性』。だから面白くないサッカーになるんだって思った」

「耳が痛いね」

木村が苦笑いする。

「で、日本のサッカーを変えるための準備を始めた。まず俺自身力をつけなきゃ話にならないからイングランドで力をつけながら計画を実行していった」

「実行？」

「まず一つはイングランドで所属してたチームを優勝させること。もう一つは俺が小学校を卒業すること。」

「なんで？」

「小学生だったら監督に意見言えないし、プロになったら日本を変えるには遅すぎると思ったから。まあイングランドで優勝するのに時間がかかったんだけど」

「で、なんで唐冲なの？」

「イングランドで優勝した時、久保に相談したんだ。んでいくつか高校を紹介された。その中で一番成績が悪い高校を選んだ」

「何で？」

「常勝軍団みたいなチームだと意見いいにくいじゃん」

大石が準備体操を終える。

「だから俺はこのチームを全国に連れて行く。日本を変えるよ、俺は」

「楽しみだね」

「ところでお二人さん」

後ろから女の声がした。

「いつになったら練習始めるのかな？」

「お、岡本」

木村の顔がひきつる。

後ろを振り向くと、180センチ近い身長、長い黒髪を後ろで束ねたジャージ姿の女性が仁王立ちで立っている。

目の色は茶色で、かなりのプロポーションだ。

「さつさと練習始めろっ！」

「はーいつ！」

木村が大石の手を掴んで走る。

「だ、誰？」

「岡本瀬恋、おかもとせれんこのマネージャーの一人だよ」

木村が走りながら説明した。

「さて　練習だ」

木村の口調が変わる。

「お前の力見せてもらうよ、大石」

木村の顔は先程までとは違い真剣そのものだ。

「ちゃちゃっと入れ！」

北条に怒鳴られる。

「今から試合するから、右のチームに入って」

木村がそう言いながら大石の手を掴んでチームの方に走る。

「いきなり試合？　日本はそんな練習ばかりなのか？」

「今年のウチは特別なんだよ。ま、相手は守備、こっちは攻撃だけの試合だから。こっちはゴール決めれば勝ち、相手はクリアしたら勝ち。じゃ、力試させてもらうよ、大石」

## 初練習（前書き）

ピッチ 試合する場所。

サイド ピッチの横。

オフエンシブミッドフィルダー フォワードの次に攻撃的な真ん中の位置のポジション。

サイドハーフ サイドに位置するポジション。

ディフェンシブミッドフィルダー ミッドフィルダーの中で一番後ろで守備的なポジション。

トラップ ボールを受け止めてコントロールすること。

ドリブル ボールを運ぶ技術のこと。

パス ボールを味方に渡すこと。

横パス 横にパスすること。

シュート ゴールを狙ってボールをコントロールすること。

ナイシュ 「ナイスシュート」の略。

アーリークロス センタリングの一種で相手DFが戻りきらないうちに、ディフェンラインとGKの間を狙って、浅い位置から早めに入れるクロスのこと。

ダイレクトシュート トラップせずにシュートを打つこと。

センタリング サイドからペナルティーエリアの中にボールを出すこと。

クリア 自分達のゴール近くにあるボールを遠くにはね返すこと。  
ヘディング 空中でボールを頭に当ててコントロールする技術のこと。

スライディングタックル 相手の足もとに滑り込み、ボールを遠くに蹴り出すタックル。

ゴールキーパー サッカーで唯一手が使えるポジション。基本的にゴール前で構えている。

センターバック ディフェンスライン中央のゴール前方に位置す



るディフェンダーのこと。

フォワード フォーメーション（布陣）で一番前にいる選手。基本的に得点能力が高い選手が起用される。基

## 初練習

ミニゲームが始まろうとしている。

ミニゲームはピッチの半面を使い、右側から左に攻める攻撃側、その攻撃を抑える守備側に分かれている。

サイドの選手は攻撃側と守備側を交代しながらやるようだ。

最初はフォワードに大石と木村、オフエンシブミットフィルダーにバンダナ男、左サイドハーフには身長180センチくらい、中肉中背で黒い目に黒髪がボサボサの男。

右サイドハーフには容姿端麗、黒髪で長髪の身長165センチくらいの男。

小柄でかなり細身だから、一番接触プレーが少ないサイドに配置されたのだろうか、というくらいフィジカルが弱そうだ。

相手はサイドハーフが二人、ディフェンシングミットフィルダーが二人、センターバックが三人だ。

「試合、始めるよ!」

岡本が大きな声で叫んだ。

試合はバンダナ男がパスを出すところから始まる。

バンダナ男は右サイドハーフにパスを出す。

右サイドハーフの選手がボールをトラップ、そのままドリブルで仕掛けた。

相手サイドの選手と1対1の場面となるが、バンダナ男に横パスする。

バンダナ男から、まるでシュートのようなパスが大石に出される。

大石は相手のディフェンダーを背負いながら見事にボールの勢いを殺し、キープする。

2秒ほど待つと味方の左サイドハーフボールをもらいにサイドラインを駆け上がって来た。

そのまま左サイドハーフにパスを出すことも出来たが、大石の脳裏には木村の言葉が浮かぶ。

（こいつらの力だけで勝とうとするんだっけか、確か）

大石はディフェンダーの意識が左サイドハーフに移ったのを感じた。

大石はボールを相手の股を通し、自分は相手ディフェンダーの右側を通る。

完全に相手ディフェンダーを抜いた。

想定外の状況にゴールキーパーの反応が一瞬遅れて前に飛び出す。

すかさず、大石が真横にパスを出す。

そこに木村が走り込む。

木村の速さを計算したかのようなパスを木村がダイレクトでシュートを放つ。

ボールは無人のゴールに収まった。

「ナイシュ―」

大石が木村に声をかけた。

「ナイスパス」

木村が大石に返した。

「次！」

岡本が大声で指示を出した。

次のミニゲームは大石は出なかった。

大石は座ってピッチの外からミニゲームを見ていた。

「お見事」

バンダナ男が声をかけて来た。

「ありがとう えっと」

「あへまさこ  
阿部雅人だ、大石」

阿部は大石の隣に座る。

「相手の意識が自分から別な選手に変わるタイミングで抜いて、  
ゴールキーパーが前に出てくるところで木村がダイレクトで打てる  
ぎりぎりのタイミングでパス 広い視野と卓越した技術を持ち合  
わせてなきゃ出来ない」

阿部がぼそぼそと喋る。

「でもストライカーとしては0点のプレーだと思う」

「それって褒めてるの？ けなしてるの？」

「どっちでもない。ただの事実」

阿部がそこまで言うと、岡本に呼ばれ、次のミニゲームに参加する  
べく、立ち上がった。

一時間経ったところだろうか。

一人の男がグラウンドに現れた。

「すみません、遅くなりました」

男は大石と同じくらいの背格好でジャージ姿、黒髪を短く刈り上げである。

「ホント遅いです、下山先生」

木村がそう言って、ミニゲームが中断する。

下山はそのままキーパーグローブをつけて使って使わなかった方のゴールに歩いている。

「次、全面使ってミニゲームやるから、2チームに分かれて」

木村がそう指示すると、じゃんけんが始まった。

勝ったチームと、負けたチームに分かれるらしい。

大石は木村とじゃんけんをして勝った。

二チームに分かれる。

大石はチームの面々に自己紹介してもらった。

さっきまでゴールキーパーをしていた170センチ弱しかなさそうな黒髪、短髪の少年は坪谷友紀。つばやゆうき

やや淀んだ目をした180センチくらいの黒髪で長髪、髪が目にかからないように細い紐状のヘアバンドをつけた容姿端麗なセンターバックが小柳和洋。おやなぎかずひろ 黒髪の短髪で身長が大石より若干高いプロレス

ラー並の筋肉を持つ大型CBが山井陽明。やまいようめい

大石と同じくらいの身長で、無造作に髪をいじってあるディフェンシブミッドフィルダーが大島穀人、おおしまこうてい先程の細身の右サイドハーフは藤原漣、ふじわられんぼさぼさ頭の左サイドハーフは丸山向陽、まるやまこうようオフエンシブミッドフィルダーには阿部。

フォワードは大石と背格好が大石と全く同じで、女性十人いたら十人全員が振り返るような顔立ちをし、長い黒髪をヘアゴムで縛った。ながたれいら永田怜来。

岡本の笛で試合が始まった。

大石と永田がピッチ中央に行く。

永田が大石の前にボールを転がして試合が始まった。

大石は後ろにパスを出すと、阿部がさらに後ろにパスする。

小柳が左サイドの丸山にパスを出す。

丸山はすぐに永田にアーリークロスを入れ、永田は胸で一度トラップして走り込む阿部にパスを出す。

阿部がダイレクトシュートを打つが、相手ディフェンダーが足を出して弾いた。

ボールは右サイドの藤原に渡る。

藤原がドリブルでペナルティーエリアの隅まで運び右足で永田に向けセンタリングを上げた。

センタリングは相手ディフェンダーがヘディングでクリアしたが、クリアボールを大島が拾う。

大島がペナルティーエリアよりもずっと前にいて、ゴールに背を向けていた大石にパスを出す。

大石は永田にパスを出せば確実に一点が取れるような位置にいるのを確認していたが、先程の阿部の言葉を思い出した。

『でもストライカーとしては0点のプレーだと思う』

やってやるうじゃないか。

大石はゴールの方に振り向き、丸山の方に視線を移す。

相手がそれにつられ足に体重をかけたところで右から抜く。

右側から相手がスライディングタックルを仕掛けて来た。

大石はボールを足で挟んでジャンプする。

相手はスライディングしたまま大石の足の下を通り過ぎる。

ペナルティーエリアの中に入る。

そこからシュートを打つことも出来たが、もし目の前のDF一人を



抜けばGKの下山と1対1になる。

大石はそちらを選択した。

DFが大石との間を詰める。

大石はボールをDFの股の間を通し、自分は左から抜けた。

ボールをラインぎりぎりで止めてラインの上でドリブルをする。

少し下山が前に出る。

大石はそこから右足で大きく蹴るふりをした。

下山はシュートを打つと思い、シュートを止める体制になったため、一瞬動きが止まる。

その隙に下山の右を抜き、無人となったゴールにボールを蹴りこんだ。

岡本が笛を吹く。

味方の選手が自陣に戻る。

阿部がぼそぼそと話し掛けて来た。

「お見事。それがイングランド流？」

「違うよ、オレ流だ」

大石がそう言うのとそれまで無表情だった阿部が微笑んだ。

優しい、微笑みだった。

ミニゲームは1時間くらいで終わり、その日の練習は終わった。

元から唐沖にいた奴だと思われる選手は元から唐沖にいた奴にしか、よそから来た奴と思われる選手は元から唐沖にいた奴にはパスを出さなかった。

元から唐沖にいた奴にも、よそから来た奴にもパスを出していたのは大石を除けば木村、永田、山井の3人だけだった

練習が終わり、何人かがグラウンド整備をしているのを大石が見ていると、岡本が話し掛けて来た。

「凄かったね、さっきのプレー！ 磐田のイ・グノみたいだったよ！」

イ・グノが誰だかは知らないが、引き合いに出すことはきつと凄いプレーヤーなのだろう、と思い「ありがとう」と言っておいた。

「あ、私の名前は」

「岡本瀬恋、でしょ」

「なんで知ってるの！？ 言っただけ？」

「木村に聞いた。鬼軍曹だつて」

「ヒドーい！ 私そんなに怖くないよ！」

その後も岡本が一方的に喋り続ける。

怖い、のではなくただ単に言葉が粗雑で声が大きいだけのようだ。

性格はかなり明るいようで、よく笑っている。

変な日本語にはなるが、笑い顔がとても似合っている人だ。

大石は頭の中の「怖い人」フォルダから「明るい人」フォルダに入れ替えた。

「瀬恋！」

女の子の声がした。

声がした方を向くと、長い黒髪を後ろで縛っていて、黒く澄んだ目をしている。

身長は160センチあるかないかぐらい、顔立ちは絵本のお姫様がそのまま出てきたような顔をしている。

小さな唇が再び開く。

「仕事サボらないでよ」

「はい またね、大石君」

岡本が女の子の方に歩いて行く。

「一目惚れか？」

阿部が後ろから話し掛けて来た。

隣にはさっきの試合で相手のディフェンシブミッドフィルダーをやっていた身長180センチ弱ぐらいでかなり腕や足が細い痩せ型の男がたっている。

「競争率高いよ、アイツ。多分一番だよ、学年で」

既に二人の中では一目惚れしたことになるらしい。

「一目惚れなんかしてねえよ、ってかアンタ、名前は？」

「大竹。おおたけみその大竹美蘭。よろしく、大石」

グラウンドの整備が終わったらしく、道具を片付けている。

「疲れた」

木村が道具を片付け終わるとすぐにへたつと座る。

さっきまでの真剣な顔はどこかに行ってしまった。

木村の周りに大石、阿部、大竹の三人が集まる。

「相変わらずスタミナないな」

「ダメじゃん、やっぱり」

「うるさいな」

四人でしばらくだべっていると、後ろから岡本が声をかけてきた。

「仕事手伝って！」

「え」

「やだ」

「やだ、めんどくさいし」

「仕事って何？」

大石だけ否定しなかった。

「ほら、大石君を見習いなさい！ はい立って立って！」

「拒否権無し？」

「無いよ！ ほら早く早く！」

仕事はボールを綺麗にしたり、数を数えたり、用具室を片付けたりと、平たく言えば雑用だった。

「いつもこれやってるの？」

ボール置場の前で岡本と二人でボールを磨いていた大石が聞いた。

「まあね。大変だけど、やり甲斐あるし。それに」

岡本が、立ち上がり大石の目の前に立った。

「変えてくれるんでしょ、唐冲サッカー部を」

岡本が大石の目を見る。

そのまま吸い込まれてしまいそうな程大きな目に大石が移る。

「聞いてたんだ、さっきの話」

岡本が頷き、大石に近付く。

岡本の顔が大石のすぐ近くまで迫る。

「期待　してるよ！」

岡本がデコピンをした。

「痛った！」

「へへっ、びつくりした？」

「そりゃびつくりするわ！」

大石の顔が少し赤くなっている。

「なんか楽しそうだね」

木村が声をかけた。

隣にはさっきの女の子がいた。

「自己紹介すれば」

木村が少女に言う。

「う、うん      石川麻美です、よろしくお願いします」  
いしかわあさみ

「よろしく」

大石が右手をあげて挨拶する。

石川は恥ずかしそうに下を向いた。

岡本が大石の耳のそばまで顔を近付け、耳打ちする。

「麻美のめっちゃタイプの顔だから、恥ずかしがってるんだよ！」

「ちょ、瀬恋！」

岡本の声は大きくて石川に聞こえてしまった。

「あちゃー」

「あちゃーじゃないよ!」

石川が岡本の手を掴み、

「じよ、冗談だからね、大石君!」

「う、うん」

石川の勢いに押されて頷く。

木村は文字通り腹をかかえて笑っている。

「楽しそうだね、なんか」

「何やってるの?」

阿部と大竹、それにもう一人石川よりも小柄で、長い黒髪にカチュ  
ーシャをした女の子が立っていた。

「あ、あの 大丈夫ですか?」

女の子のやわらかな声が、騒動から逃げた大石に問い掛ける。

「あ、ああ」

「わ、私、本間奈由未ほんまなゆみです よろしくお願いします」

本間が頭を下げる。

「あ、大石未華瑠です、大石でいいよ」



大石も頭を下げる。

「お見合いみたいだね、なんか」

大竹がニヤニヤしている。

「ちょ、な」

本間は顔を真っ赤になって言葉が詰まる。

「お見合いって何？」

大石が阿部に小さな声で聞く。

「  
気にするな」

阿部がぼそぼそと言う。

「帰っていいよね、仕事終わったから」

大竹が一騒動終わった岡本に聞く。

「あ、うん！　ありがとね、四人共！」

岡本がそう言ったので、四人共部室に戻った。

大石達は部室に入った。

部室に残っていたのは制汗スプレーの臭いだけだ。

大石達がのろのろと着替え出す。

「あ、体操着借りっ放しだ」

「洗って明日返せば？」

「そうすつか」

そんなこんなで着替え終わった。

「いつもあんな練習なの？」

不意に大石が聞く。

「基本練習はやってたよ、お前が来る前に。ミニゲームはその次」

「なんでミニゲームばかりなの？」

「『感覚は実戦でしか磨けない』って下村先生は言ってたけど」

「先生？」

「顧問の先生であり、監督でもあるんだよ。日本はコーチが都会や強豪に集まりやすいからね。唐沖みたいな弱小高や県立には専門の監督がいることは少ないんだよ」

「ちなみに体育の教師だから」

「監督としての力量は？ さっき監督の能力が不足してるとかいつてたこと」

「分かんない、赴任したの今年度だし。今年の春休みからだよ、練習内容変わったのは」

大竹が答える。

「まだ正式に発表する前から来てたからね」

「へえ」

「もう質問は終わり？」

「ん、ああ。教えてくれてありがとう」

部室を出て、玄関を出るとちょうどマネージャー達と一緒にあった。

「あ、大石君の家どこ？」

「あっち。つか大石でいいから」

大石が右を指す。

「じゃ、麻美と方向一緒だね！」

岡本が暗闇でよく見えなかったが、ニヤリと笑った気がした。

「ふうん」

大石がそう言っていると石川の方を向く。

「じゃ一緒に帰る?」

「え!」

石川がいきなり大きな声を出す。

「び、びつくりした」

「あ、ごめんなさい」

「じゃ俺達帰るから」

木村達が駐輪場に行く。

「じゃあね」

「上手くやってね!」

岡本がそう言っていると石川が焦る。

「ちょ、瀬恋!」

「上手くって? 何やるの?」

「気にしなくていいの!」

「わ、分かった」

石川の迫力に押される。

「じゃ、帰ろうか」

「は、はい」

石川の声が上擦る。

木村が歩き出し、石川がそれに合わせて歩き始めた。

大石と石川が二人並んで歩く。

が、ほとんど会話がない。

なんかしゃべらなきゃと石川が色々な質問をするが、すぐに会話が終わってしまう。

「日本語、上手いんですね」

「親父は日本人だからね」

会話終了、沈黙が始まる。

こんな感じが延々と続いている。

どうしよう、と石川がそんなことを考えていると、いきなり大石が石川に質問した。

「あそこの高校、まだ練習してるの？」

大石が指差す方を見ると、学校のグラウンドがある。

「えっと、あれは中学校ですけど、普通の学校の部活は、夜八時位までやってますよ。ウチは照明ないから暗くなったら終わりますけど」

「そうなの？」

「はい」

（あ、また会話終わっちゃった）

石川がしょぼくれていると、大石が再び口を開く。

「なんで敬語なの？」

「え？」

「同い年だろ、俺ら。なんかよそそしいっていつか」

「すみません　でも」

「ほら、また敬語。岡本とか木村とかとしゃべる時と違う。」

「あ、すみま　ごめん」

「謝らなくていい」

「え、ごめん、あ、だめなんだ えっと」

石川が焦りと緊張であたふたしている。

「俺と話してる時の顔、硬いんだよ。岡本達と話してる時は楽しそうだけど つままない？」

大石の少し悲しそうな表情が照明に照らさせる。

「そんなことない、私も大石君と喋ってたいよって私、何言ってるんだろ」

石川が少し顔を赤らめる。

大石が微笑む。

「やっと敬語とれた」

「え、あ、本当だ」

「やっぱりそっちの方がいいよ、自然つつつか、似合つつつか」

「あ、ありがとう」

石川の顔がさらに赤らむ。

石川はそれに触れられる前に話題を変えた。

「大石君は、なんで日本に来たの？」

「あ、大石でいいから」

大石はそう前おきして、木村に話した話をした。

「凄いね、大石君」

「大石でいって で、何が凄いの？」

「まだ高二で 私と年齢変わらないのに 私はそんなこと、考えたことなかったよ」

石川が笑う。

大石に対する嘲笑でも、苦笑でも、もちろん喜びの笑みでもなかった。

「ダメだね、私」

石川は自らを嘲るように笑う。

「そんなことないと思う」

「え？」

「何かを変えるってことは、正しいかどうかなんか分かんないよ？俺は所詮よそ者だから、日本人の価値観とか、なんかそういうのが気に入らない。けど、石川は変える必要はないって思ってる、だ



から変えようなんか思わなかったってだけだよ、きっと。それに早く決めたから凄いつて訳じゃない。サッカーでもそうだ、本格的に始めたのは15才、なんて人間もいる。物事始めるのに遅すぎるなんてことはないって　少なくとも俺はそう信じてる」

大石が歩みを止める。

「ま、ゆっくり探せばいいさ。焦らなくてもそのうち見つかる」

「うん、分かった。ありがと、励ましてくれて」

「どういたしまして。ところで、石川の家はどこ？」

目の前は二手に別れている。

「あ、右の方。」

「俺とは逆だ　送って行こうか？」

「い、いいよそこまでしなくて」

「そう？　じゃ、また明日、部活で！」

大石はそう言って走って行った。

「私同じクラスなんだけどな」

石川がぽつりと呟いた。

## 初練習（後書き）

イ・グノ      2009シーズンに磐田に途中加入した韓国入ストラ  
イカー

大石のゴールは磐田対大宮戦の3点目を参考にしています。

## 転校二日目

翌日、学校に行く途中で昨日別れた道で石川に会った。

今日は自転車に乗っている。

石川がブレーキをかけて止まる。

「おはよう。今日は自転車なんだね」

大石が右手をあげて挨拶する。

「うん。昨日はたまたま歩いただけなの」

石川がそう言って自転車から降りる。

「あ、降りなくてもいいよ。走って追いかけるから」

「え、でも」

「大丈夫だって、ほら、物は試しって言うだろ？」

「う、うん」

石川は再び自転車に跨がった。

「ふう」

「 凄いね、2キロ位あるのに 」

石川が驚いている。

あれから本当に大石は石川の自転車と同じ速度で走っていた。

それも話しながら。

「毎日のトレーニング？」

石川が尋ねると大石は首を振る。

「身の回りの物殆ど持っていないんだよ。こっちで調達する予定だったから 」

大石がそう言いながら時計を見る。

「で、何でこんな早く来させられたの？」

現在7時。

昨日木村に「朝7時に集合」言われ、来させられた。

「今から朝練だよ」

「マジでか 」

フィジカルトレーニングや基本練習を中心とした朝練が終わり、教室に行く。

昨日は何の気無しに見ていたが、練習でサッカー部のメンバーを知った今は誰がどこにいるのか気にするようになっていた。

阿部が一番廊下側の最前列、石川はその後ろ。

その列の一番後ろが大石だがその前に岡本がいた。

そういえば昨日一番多く質問してきたのは岡本だった気がする。

大竹は阿部の隣、木村は大石の斜め前、それから山井が一番窓際の一番後ろの席にいる。

自分の席に着いて、イングランドから持って来た数少ない持ち物であるMP3でお気に入りのJ-POPをヘッドフォンで聴く。

しばらくすると登校してきた人間が増えたせいか周りがつるさくなる。

そんな時、横から早百合に肩を叩かれた。

MP3を止めて、ヘッドフォンを外す。

「ねえ、昨日石川と帰ったって本当？」

「帰ったけど　それが？」

「それがつて　石川が唐沖のマドンナだって知ってるの？」

「ああ　誰かが言ってたな」

「そんな奴と二人きりで帰ったんだよ、みんな噂してるよ」

「何を？」

「付き合ってるのかって」

「んな訳ないじゃん、昨日会ったばつかなのに。だいたい女の子一人じゃ危ないだろ、それだけの理由だよ」

「まあそうなんだろうけども　気をつけてね、ただでさえ転校生っていうだけで目立つのに、そんな子と二人きりで帰れば噂になるよ」

「わかった。気をつけるよ」

「それに、大石かっこいいし」

「べ、別にかっこよくは」

大石が褒められて照れる。

「可愛いね、大石」

早百合は笑った。

ふと石川の方を見ると、周りに何人かの女子が囲んで話をしている。

どうも昨日のことについて話をしているらしく、あまり楽しそうには見えない。

「悪い事したかな」

午前中の授業は至極退屈で、朝練の疲れもあってか睡魔に襲われながらもなんとか無事に授業を終えた。

昼休み、周りではおいしそうな匂いが立ち込める。

「大石君、ご飯食べないの？」

弁当片手に岡本が大石に質問する。

木村の席に石川が、岡本の机の右側に隣のクラスから来た本間が椅子だけ借りて、岡本の机の上に弁当を置いて座っている。

大石は「大石でいいから」と前置きしてから答えだす。

「食べるさ、そりゃ」

大石が自分のスポーツバッグからコンビニのビニール袋を取り出す。

「お弁当じゃないんだね」

「俺料理出来ないから」

「料理出来ないって 両親は？」

「親は仕事あるからイギリスにいるよ」

「そうなの？ でもコンビニだけだとバランス悪くない？」

「ま、そうだけど」

大石がそう言うのと岡本が何かを思いついたらしく、顔が綻ぶ。

「麻美に作ってもらえば？」

石川が驚いて食べていた物を喉に詰まらせて咳込む。

「大丈夫！？」

岡本が石川の背中を叩く。

「う、うん 　　ってか変なこと言わないでよ！」

「だって麻美の作るご飯美味しいじゃん」

「自分で弁当作ってるの？」

大石が聞く。

「うん、まあ」

「ほら作ってあげなつて！ 大石もそっちの方がいいでしょ？」

勿論作ってもらうに越したことはないのだが、今朝の早百合の話を



聞いているし、あまり気の進む話ではない。

かと言って強く拒否する訳にもいかない。

「うーん まあ作ってもらえれば有り難いけど」

大石的にはやんわりと拒否したつもりだった。

「うん、作ってくる」

目論みは外れた。

「よかったね、大石！」

その時、飴をくわえながら木村が戻って来た。

後ろに阿部が立っている。

バンドナを外すと髪で目が見えない。

木村が早百合の席に座り、阿部は地べたに座った。

そのまま談笑を始めた。

午後の授業も退屈で、前に座っている岡本は熟睡、木村も眠そうだ。

早百合は携帯を使って何かをしている。

大石もあくびをしながらなんとか睡魔に堪えている。

早百合から手紙を渡される。

中を見ると『次の授業屋上行かない？』と書いてある。

大石が頷く。

しばらくしてからチャイムがなり、だらだらと立ち上がり、早百合と共に屋上に来た。

屋上には既に人がいた。

3台並んだベンチのうち一つに久保が座っていて、その隣に長い茶髪を後ろで束ね、前髪をピンで止めている140センチ位の男の子がハンカチを目の上に置いてスヤスヤ寝ている。

「寝ちゃったんだ、ふつと楓人」

早百合が久保に聞く。

「うん。待ちきれなかったみたい」

「誰？」

早百合に聞く。

「私の弟の志賀しがふつと楓人。昨日会わなかった？」

早百合がハンカチを取る。

すると、少女のような顔が現れた。

昨日の練習で相手側のフォワードだった奴だ。

「可愛いよね　食べちゃいたいくらい」

「ちょっと、絵実香、勝手に手を出さないでよ」

「冗談よ、冗談」

久保が笑っていると、ドアが開く音がした。

そこには身長190センチくらいの金髪で、ブレザーのボタンを全部外した昨日の練習で木村、志賀と共にフォワードをしていた大柄な男と、本間が入って来た。

「ちょっと滝田、またサボる気!？」

本間が大石や岡本達と話す時とは違う口調で滝田を咎める。

「うつせーな　お母さんかお前は」

「ほら、授業受けなきゃ留年するよ」

「まだ大丈夫だって!」

「そっというのが一番危ないの!」

本間の説得を聞かず、滝田はベンチに座ろうとした時、大石と目が合った。

「おっと　まだ自己紹介してなかったな。滝田剛史<sup>たきたたけふみ</sup>だ、よろしく、転校生」

「大石未華瑠だ。大石でいいよ」

滝田はそれを聞くと満足したようで、ベンチに寝転んだ。

滝田の身長では足が少しはみ出す。

本間が滝田を連れていくのを諦め、自分の教室に戻った。

「で、何で俺は連れて来られたんだ？」

「暇だったから　相手してよ」

「ふざけんな」

そう言うと早百合が不満そうな顔をする。

春の風が肌をくすぐる。

グラウンドからは体育の授業を行っているのか、がやがやと騒いでいる音がする。

のどかな日常の風景だ。

「ま、いいか今日ぐらい」

## スポーツテスト

朝練が終わり、昨日のように机に座っていると、久保が手に袋をもつてやって来た。

「おっはよ！ ハイ、これ」

大石に袋を手渡した。

「何これ？」

「体操着。今日使うからね」

「体育あつたつけ？」

「今日スポーツテストだよ」

「スポーツテスト？」

初めて聞いた気がする。

「うん。今日の午後からだから、あまりお腹いっぱい食べないでね」

「分かった」

昼食は石川が作ってくる、と言ったがとりあえず家の近くのコンビニで買ってあった。

さして量はない。

久保は手を振って自分のクラスに戻る。

「絵実香とはどういう関係？」

前に座っていた岡本が聞いてきた。

「どうって　ただの幼なじみ」

別に隠すものでもないので正直に答える。

「じゃ付き合ってるわけじゃないんだ」

「当たり前じゃん」

「そっか」

岡本が笑った。

今日も退屈な授業が進み、昼食になる。

岡本達は今日も昨日と同じ席に座る。

石川は二つ弁当を持っている。

「はい、お弁当。美味しいといいんだけど」

弁当を受け取り、蓋を開ける。

色合いも良く、旨そうだ。

「いただきます」

玉子焼きを箸で掴んで口に運ぶ。

「どう？」

石川が不安そうな表情で見つめる。

「うん、美味しいよ」

本当に美味しかった。

石川は安堵の表情を浮かべる。

「よかったね、麻美」

岡本が笑いながら肩をゆする。

大石が石川が揺すられる間に色々な物を食べている。

あっという間に平らげた。

「ごちそうさまでした。美味しかったよ」

「ありがとう、大石」

石川の顔が赤くなる。



「麻美照れてるの?」

「そ、そんなんじゃないから!」

石川が少し大きな声を出す。

教室にいたみんなが石川の方を見る。

ちよつと気まずい雰囲気になる。

「どうしたの?」

ちよつと良いタイミングで木村、阿部山井がやって来た。

場の雰囲気が少し良くなった。

スポーツテストを受ける時間になった。

体育館に移動し、用紙を渡される。

身長や体重を書いて、紙を折り畳んだ。

久保が前に出て指示を出す。

いつもの感じはまるでなく、きびきびと指示を出している。

「ね、大石の時とは違うでしょ?」

前にいる岡本が振り返って言う。

「絵実香って、大石のこと好きなの？」

「俺に聞くなよ」

大石の顔が熱くなる。

「照れてるの？」

「そんなんじゃない」

「またまた」

「木村みたいな言い方するなよ」

その後準備体操を行い、クラス毎に種目別に別れた。

大石達のクラスは立ち幅跳びからだった。

大石が指定された場所に立つ。

「じゃ、跳んでいいよ」

計測役の生徒に言われる。

勢いをつけ、跳ぶ。

空中にしばらく浮遊し、見事に着地を決める。

「2メートル75センチ！」

周りがざわめく。

「　　凄いな」

隣にいた阿部に言われる。

「そうなの？」

「2、65メートル跳ぶと最高点です」

阿部の隣にいた藤原が言う。

「　　まあ、この種目であいつに勝つ人はいないと思うけど」

阿部が指差す方には滝田がいた。

「2メートル85センチ！！」

周りがさつきよりざわめく。

「　　化け物だ」

その言葉が聞こえたのか滝田は豪快に笑っている。

「跳躍力、は、凄い」

いつの間にか大石の隣にいた永田が呟く。

「、は、ってなんだよ！」

滝田が永田に言う。

滝田の近くにいた何人かのおそらく下級生がビビっている。

「怖がられてる、滝田」

永田は笑いもせず次々の種目に向かった。

次の種目は50メートル走だった。

大石はクラウチングスタートの体勢を取る。

ピストルの音で走り始める。

他の三人をすぐに引き離し、一着でゴールした。

タイムは5秒2だった。

「凄いね、大石　陸上選手並」

石川が驚いている。

「今日は調子が良かったただだよ」

大石が少し照れた様子を見せながら答える。

次の木村がいるグループが走り出し、木村が一着でゴール、タイムは5秒1だった。

「足速いな、お前」

「ありがとう」

木村が笑った。

「100メートル持たないんだけどね」

「バラすなよ」

「スタミナないんだな、お前」

再びピストルになる。

志賀が走っていた。

あっという間にゴールする。

「5秒0!」

「お前より速いな、木村」

「っっていうか速過ぎ」

「ありがとうございます」

志賀は顔だけでなく声も少女のようだ。

「5秒ジャストなんてトップクラスの陸上選手の速度だよ」

石川が寝めると、志賀が顔を赤くした。

「顔真つ赤だよ」

木村がからかう。

「は、走ったからです」

志賀は目線を下にして言う。

木村がニヤついている。

その後、大石は握力50キロ（トップは坪谷の72キロ）、上体起こし38回（トップは北条の41回）、長座体前屈65センチ（トップは阿部の72センチ）、反復横跳びは65回（トップは木村の71回）、ハンドボール投げは37メートル（トップは坪谷の49メートル）、シャトルランは172回（トップは永田の194回）だった。

「大石全部10点！？ 凄すぎだつて」

得点は握力が56キロ以上、上体起こし35回以上、長座体前屈6

4センチ以上、反復横とび63回以上、50m走6・6秒以下、立ち幅とび2メートル65センチ以上、ハンドボール投げ37メートル以上、シャトルランが125回以上が10点だ。

「でも一番じゃないし」

「一番は無理だよ、あいつらおかしいもん」

「誰がおかしいって？」

岡本の後ろに木村がいた。

「あんた達以外に誰がいるの？」

岡本と木村が口喧嘩を始める。

「あの二人仲悪いの？」

岡本の隣にいた石川に聞くと、首を横に振る。

「本当に仲悪かったら、喧嘩なんかしないよ。喧嘩するってことは、相手になんらかの関心を抱いてるってことだから」

「そっか」

大石はそう言うのと石川の手に持っていた2、3枚の紙を見る。

「それ、何？」

「2年生の成績」

「ちょっと見せて」

「えっ、ダメだよ、個人情報だから」

「頼む、ちょっとだけだから」

大石が手を顔の前で合わせる。

「まあちよつとだけなら」

石川が紙を渡す。

大石が5、6秒紙を見て石川にすぐに渡す。

「ありがとう」

「うん 何が見たかったの？」

「サッカー部の成績。笑えるぐらいに一長一短だったけどね。跳躍力はあるけどスタミナが少ない奴、足は速いけどスタミナがない奴、体柔らかいけど足が遅い奴、力はあるけど足遅い奴 でもだからおもしろい」

「おもしろい？」

「この個性を殺さずチームを作れば、この国のサッカーを変えられるかもしれない」

大石が微笑む。



「俺はのために来たんだから」

「大石」

「変えられるかも、じゃなくて変える、でしょ!？」

岡本が口を挟む。

「ああ、そうだな」

「じゃ、がんばりますか」

## 休日

大石が日本に来てから初めての土曜日、部活を終えてからナビ役に木村を連れ、町を散策し始めた。

始めに自転車を買い、自転車を漕ぎながら町をうろろろする。

「さっきここ来なかった？」

「そうだったけど？」

もとい迷った。

「ってかなんでお前が迷ってたんだよ、地元だろ？」

「あ、阿部だ〜」

阿部が自転車に乗って角を曲がる。

「ついてこ〜」

木村が自転車を漕ぎ、阿部を追跡し始めた。

「おい、待てよ」

大石が後を追う。

阿部はあるかなりでかい建物の前で止まった。

「ここは？」

「町の体育館だよ」

阿部が中に入る。

「ってか何でついてきたんだよ」

「俺らも行くよ」

木村が中に入る。

「おい、人の話聞けよ」

中に入り、阿部を尾行する。

阿部は二階に上がり、ある部屋に入る。

「ここは？」

「まあジムみたいなもんだよ」

木村がドアを開けた。

阿部がドアに背を向け一人でトレーニングをしている。

「凄いね」

誰も寄せ付けない雰囲気纏っている。

トレーニングを終え、こちらを向く。

「どうした？」

「道に迷った」

「そう」

阿部は表情一つ変えない。

「何してるの？」

「トレーニング」

「それは分かるけど」

「筋トレ」

「だから分かるって」

「練習の不足分を補ってる」

「不足分？」

「俺の欠点はフィジカルの弱さだ  
はやっていけない」

ある程度はないと高校で

阿部は汗をタオルで拭き、椅子に座る。

「長所を伸ばそうとかは、思わないの？」

「思ってるよ。でもジュニアユースでしか通用しなかった」

阿部が視線を落とした。

「試合にもそれなりに出ていたし、テクニクなら誰にも負けない自信があつた　でもユースには昇格出来なかった」

「フィジカルのせい？」

大石が聞くと阿部が頷く。

「そう伝えられた」

「ならフィジカルの低さに目をつむってもいいくらいテクニクを磨けばいいだろ？」

「　中学から唐冲に入ったやつはフィジカルがそれなりに高かつた。　でも俺は身体能力そのものが低い。　せめて接触プレーで吹っ飛ばされないだけの筋力は最低限必要だ。　長所を活かすにはベースがある程度なければ出来ない」

「そうかもね」。俺達が鈴木先生が個性活かす戦い方をするために、俺らに基礎を徹底させてたし」

「基礎がなければ積み上げられないからね」

大石が呟く。

阿部が立ち上がる。

「もう始めたいんだけど」

「あ、道教えて」

「」

阿部は紙と鉛筆を取り出し、地図を書いた。

「あいつがここに来てるの知ってたのか？」

自転車に乗りながら木村に聞く。

「うん」。北条達も知ってる。だからこそ阿部達の力なしで勝とうとしてるんだけど」

「どういうことだ？」

「北条達は阿部の努力は欠点をなくすための努力だと思ってる。だから阿部に活躍されるとさらに個性を殺すサッカーが流行ると思っているのさ」。北条達は個性を活かすサッカーをやりたいからね」

「阿部はミスキャストってわけか」

「そゆこと」

「それでも、チームにならなきゃ試合に勝てない」

「だからそのために大石を呼んだんだ。北条達の意識をちよつとだけ変える秘策が俺にはある。大石は阿部達の意識を変えて欲しい」

「阿部達の？」

「もうほとんどパスを出す気が無くなってる。返ってこないんだから当たり前だけどね」

「その意識を変える」

「奇跡の男の力を見せてよ」

「分かった、やってみる。だけどお前の秘策って何だ？」

「すぐに分かるよ」

木村が不敵に笑った。

## 信頼

いつも通り部活を終え、阿部達がグラウンド整備をしようとした時、下村から集合がかかった。

「来週の日曜日、練習試合を行います」

「また急に」

志賀が呟く。

「何処とですか」

北条が聞く。

「エレンシア横浜ユース」

下村がそう言った瞬間、ドリンクを飲んでいた奴が嘔き出す。

「な?」「マジですか?」などと下村に疑問を投げかける。

「エレンシア横浜って強いの?」

大石が隣にいた木村に聞く。

「日本屈指の強豪チーム」。幼稚園生からユースまで合わせると200人以上いるユースの名門」

「へえ」



「あまり興味なさそうですね」

後ろにいた藤原が聞く。

「別にはないさ。でも人数がいくら多くても結局試合に出れるのは14人しかないんだろ？それにどんなに強いチーム相手にも勝つために最善を尽くすだけだ」

「頑張つてね」

「お前もだろ。いい加減秘策っていうのを教えろよ」

「もうすぐ分かるよ」

木村がいたずらっぽく笑う。

「ちょっといいか」

阿部が話し掛けて来た。

「帰り、ちょっと付き合ってくれるか？」

「別にいいけど」

「じゃあ玄関で待つてくれ」

阿部はそう言ってグラウンド整備を行うために走って行った。

着替えて玄関で待つ。

何故か木村も隣にいる。

「なんでお前もいるんだよ」

「気になるじゃん」

「お前の秘策のほう気になる」

そんなことを言ってる間に阿部と大竹が来た。

「じゃ、ついて来て」

連れてこられたのはラーメン屋だった。

ちゃっかり木村も付いて来ている。

カウンターに座り、4人共ラーメンを頼む。

「おいしいんだよ、ここのラーメン」

目の前に出された。

確かに美味しい。

木村が褒めちぎると、店主は喜んで、おまけしてくれた。

「で、何でここに連れてきたの？」

隣に座る阿部に聞く。

「俺は次の練習試合で勝ちたい」

「俺もそう思ってるさ」

「でもこのままじゃ勝つことは出来ない」

「だろうね。パスが回らないんだから」

「どうすればいい？」

「何で俺に聞くんだよ」

「なかなかパス来ないじゃん、海外でプレーする日本人って。同じじゃん、俺らと」

阿部に替わり大竹が答える。

阿部が大竹を睨みつけて黙らせる。

「お前はどやってパスをもらっていた？」

「簡単だ」

大石がラーメンを啜る。

「信頼すればいいんだ」

「信頼？」

「そう、信頼。信頼してパスを出す、信頼してスペースに走り込む。そういったことを積み重ねることでパスが出るようになった」

「そんな簡単なことで、か？」

「他人を信頼するってことは、他人を知らなきゃならないってことだ。他人をしって、初めて信頼関係が結べる。結構大変なことだ」

「」

阿部達は黙ってしまう。

「早く食べないとこのびるよ」

「ああ」

阿部と大竹は再び食べた。

ラーメンを食べ終わり、会計を済ませ外に出た。

冷たい夜風が顔を叩く。

「信頼か、考えたことなかったな」

阿部と大竹が自転車にまたがる。

「もう間に合わないか」

「そんなことないでしょ」

木村が自転車にまたがりながら言う。

「本気でやれば遅すぎるなんてことはないよ。ね、大石」

「ああ、そうだな」

木村がペダルを漕ぎ出す。

「そうだな」

阿部達もペダルを漕ぎ出した。

## 練習試合（前書き）

U - 18 日本代表 18 歳以下の日本代表。

U - 17 日本代表 17 歳以下の日本代表。

サイドバック 4 バックのディフェンスラインの外側、左右両サイドに位置するディフェンダーのこと。

4 - 4 - 2 キーパー以外のフィールドプレイヤーの選手のフォーメーションの呼び方の一つ。後ろからディフェンダー、ミッドフィールダー、フォワードの順。4 - 4 - 2 の場合はディフェンダー 4 人、ミッドフィールダー 4 人、フォワード 2 人ということ。現在は 4 - 3 - 1 - 2 等 4 列表記が基本になっている。

ファンタジスタ 奇想天外なプレーをする選手。システムや戦術を重要視する近代サッカーではなかなか存在するのが難しい。

## 練習試合

エレンシア横浜ユースとの練習試合の日になった。

前日までの練習で阿部や大竹達はパスを出さないようになっていたが、北条達はパスを出していないままだ。

相手の練習場まで、バスでやって来た。

唐冲と違い練習場が3面あり、全て芝だ。

「すごいね」

木村が感心している。

「そうなの？」

「ユースの練習場だけでこれだけ広いのは日本ではかなりめずらしいんだよ」

「へえ」

「あ、来ましたよ」

藤原が皆に伝える。

相手チームのエレンシア横浜ユースが姿を表す。

「フルメンバーだな」

「みたいね」

相手の選手が一人こちらを見て驚いたような表情になる。

男がこちらに向かって歩いて来る。

「君がキャプテン？」

男に話し掛けられた。

大石は首を横に振った。

「俺です」

阿部が前に出て来た。

「そう　キャプテンの城明<sup>しげあき</sup>だ。今日<sup>けふ</sup>はいいゲームにしよう」

二人は手を前に差し出し、握手をかわす。

城はくるりと背を向けるとチームメイトがいる方に戻って行った。

「どうしたんですか、キャプテン？」

ゴールキーパーであろう大柄な男が城に尋ねる。

「今日の試合は面白くなりそうだぞ、義明<sup>よしあき</sup>」



「？」

両チームともアップを始めた。

「あっちのキャプテンは有名な人なの？」

大石が周りを見渡しながらかく。

ファンと思しき人達がちらほら見える。

「U - 18 日本代表のストライカーだからね。でもこの人達は城だけを見に来てるわけじゃないよ」

「そうなの？ まあ強豪なら他にも凄い選手いるだろうけど」

「ゴールキーパーの川口義明はU - 17 日本代表。時折みせる神懸かり的なセーブと味方を叱咤激励する姿から『軍神』って呼ばれるよ。『ザ・ウォール』こと井原正樹は城と同じU - 18 日本代表。代表では4 - 4 - 2 のフォーメーションだからセンターバックだけど3 - 5 - 2 のフォーメーションのユースでは積極的に前線に上がって攻撃参加するリベロだよ。『ハマのファンタジスタ』中村俊也は中学時代には欧州留学にも行った横浜だけでなく日本中が期待してる選手。運動能力は並の上ってところだけど技術は日本屈指のトップ下だよ」

「つまり凄いんだ」

木村が頷く。

「今のままなら確実に勝てないよ」

「よゝってお前　阿部達は説得出来たんだからお前の秘策って奴にかかってるんだ」

「大丈夫」

「すつげー不安なんだけど」

試合が始まろうとしている。

横浜も唐沖も3 - 5 - 2のフォーメーションだ。

唐沖のスタメンはゴールキーパー坪谷、センターバック小柳、北条、山井、ディフェンシブミッドフィルダー大島、大竹、右サイドハーフ藤原、左サイドハーフ丸山、オフエンシブミッドフィルダー阿部、フォワード永田、大石だ。

唐沖は円陣を組まずにピッチに散った。

試合が始まる。

## 前半戦（前書き）

オーバーラップ　ボールを保持しているプレイヤーを後ろの選手が追い越していくプレーのこと。

バックパス　後方にいる味方へのパスのこと。

スルーパス　ディフェンスラインの裏などのスペースへ抜けていく選手へ合わせるパスのこと。

落とす　主に相手ゴール前でヘディング（頭でボールを頭に当ててコントロールする技術のこと）などを用い、味方がシュートできるようにパスすること。

ヒールキック　踵で蹴るキックのこと。

ボレーシュート　空中に浮いているボールをシュートすること。

インターセプト　相手が出したパスを途中で止めてボールを奪うこと

ヘッド　ヘディングのこと。

センターサークル　ピッチの真ん中を中心とした半径9・15 mの円のこと。

横パス　横方向にいる味方へのパスのこと。

フリーキック　試合中に何らかの反則があった時、反則を受けた側が反則を受けた地点からプレーを再開すること。

コーナーキック　守備側の選手が触れたボールがゴールラインを越えてピッチの外に出たとき、コーナーアーク（ピッチの隅）からのキックによってプレーを再開すること。

ミドルシュート　ペナルティエリア外やライン上付近から放たれるシュートのこと。

## 前半戦

上が赤、下が黒のユニフォームを着た唐沖の選手と上が青、下が白の横浜の選手がピッチに散らばる。

唐沖ボールで試合が始まった。

大石が永田にパスを出し、永田が阿部に、阿部から丸山にパスが渡る。

丸山がドリブルで進み、対面した7番のサイドハーフを抜こうとする。

しかし相手の7番は時間をかけさせ、5番のディフェンシブミットフィルダーが守備をする時間を作る。

丸山がオーバーラップして来た北条にバックパスをする。

ボールを受けた北条が丸山にスルーパスを出す。

丸山がフリーでボールを受け、クロスを上げた。

永田が頭で左側に落とす。

そこには大石が待っていた。

誰もが大石のダイレクトボレーシュートを予想した。

しかし大石はボールを股の間を通し、ワンバウンド直後のボールを

ヒールでシュートした。

キーパーの川口は一步も動けず見送るしかなかった。

ピッチの中は驚いた顔が並ぶ。

一人大石だけが控え目なガッツポーズをする。

「 ナイツシュール」

阿部が手を叩いて称賛した。

横浜の選手がセンターサークルにボールを戻し試合再開される。

1点取られて本気になったのか、横浜の迫力ある攻撃が来る。

相手ボランチがパスを繋ぎ、リズムを作りながら中村からのスルーパス。

これは小柳がインターセプトした。

クリアボールが丸山に渡るがすぐに奪われる。

そこから相手の7番が一気にドリブルで持ち込み、北条を引き付けクロスを上げた。

これは山井がヘッドでクリア。

それを中村が拾う。

中村が城にパス、城がワンタッチで相手の11番に渡した。

11番が前を向く。

北条が前から、大島が後ろから当たりに行く。

11番は横パス、走りこんでいた中村がミドルシュートを放った。

坪谷が飛びついたがボールはゴールネットに突き刺さる。

同点に追い付かれた。

城が1点じゃ物足りないのかボールを持って中央に向けて走る。

事実、そこから横浜のゴールショーがスタートした。

こちらの守備陣の連携ミスから取られた相手のフリーキックを中村が直接、永田が下がり過ぎたためにオーバーラップして来た井原のミドルシュート、クリアが味方に当たり取られたコーナーキックから城のヘディングを決められて前半40分が終わる頃には1-4で3点差がついていた。

ハーフタイムになる。

雰囲気は最悪だ。

しかし下村だけが微笑んでいる。

全員が下村の周りに集まる。

「後半に向けて、何が必要だと思いますか？」

全員が面食らう。

そんなことを選手に聞く監督はおそらく世界でこの人以外いないだろう。

一番初めに北条が口を開いた。

「簡単だろ、こいつらのどっちかを木村に交代させろ」

北条と俺と永田を指差す。

「それは無理です。木村君のスタミナは後半40分は持ちません」

「なら津田を入れろ、今の2トップじゃダメだ」

津田<sup>つだしゅんき</sup>春輝はフォワード兼オフエンスイブミットフィルダーの選手。

日本人版ロナウジーニョのような男だがテクニクはさほどではなく、身体能力がずば抜けている男だ。

「ダメ、じゃない」

永田が呟くように反論する。

「いつまでも前線に残って守備をしないから点取られてんだろっが！」

「俺が下がると、井原が上がって来る」

「2トップが前線に残ってないとあの3バックの誰か一人がオーバーラップしてくるからな」

大石が永田に便乗する。

北条が言葉に詰まる。

「こつちの失点は連携ミスと井原の個人技って言い切っていい。だからこのチームが変わるかどうかはお前らしだいなんだよ、北条」

「ああ！？ てめえには関係ないだろうが！」

北条が大石の胸ぐらを掴む。

「北条！」

「やめろ！」

小柳と丸山が北条を羽交い締めにする。

「呼多真！」

誰かが北条の名前を呼んだ。

観客の中の一人だった。

「相変わらずだな」



「鈴木先生」

坊主頭で眼鏡をかけた小柄な男が鈴木良太のようだ。

唐冲の誰もが驚いている。

木村だけがニヤついている。

北条が鈴木 of 近くに行く。

「その茶髪君の言う通りディフェンスはいくら個々の能力が高くて  
も連携がなければ上手くない」

「ですけど！」

「俺のために頑張ってくれるのはありがたいけどな」

「！ 何で」

「木村から聞いた」

北条が木村を睨む。

木村はニコニコと笑うだけだ。

「お前らには才能がある。だからそれを潰すのは忍びない。お前ら  
はお前らのためにサッカーをするんだ」

「わかりました」

「ちゃんとみんな仲良くな」

「はい」

北条はそう言ってチームの中に戻る。

顔から怒りは消えている。

北条だけでなく、全員が勝つ、という意志を感じた。

木村の『秘策』は成功したようだ。

下村がポンと手を叩く。

「皆勝つために何をすればいいか、理解したみたいですね」

全員が頷く。

「交代はありません。では、行って来て下さい。あなた方なら必ず勝てます」

「ハイ！」

全員が返事して、11人がピッチの中に入った。

絶望的な点差、圧倒的に攻められ勝ち目はないような試合。

それなのに、負けるとは全く思わなかった。

## 後半戦

後半が始まる直前、唐沖の選手が自陣中央に集まる。

円陣を組むためだ。

「勝つぞ、絶対！」

「オウ！」

キャプテンの阿部ではなく、大竹が声を出す。

皆がピッチに散らばる。

後半が始まる。

後半になってからも横浜の攻撃が続く。

しかし、前半のような不安定さはなく、きつちりと横浜の攻撃を跳ね返す。

しかしセカンドボールを拾うことが出来ず、波状攻撃が続く。

相手のシュートが山井に当たり、小柳の足元に転がる。

小柳は前に大きく蹴り出した。

ボールはディフェンスラインの裏を狙って走っていた大石の目の前に落ちる。

副審をちらりと見ると旗を上げていない、つまりオフサイドではない。

フリーでボールをトラップする。

キーパーの川口と1対1になる。

川口が前に出て来る。

つま先をボールの下側に差込みボールを浮かせる、チップキックでゴールを狙った。

川口がジャンプしながら手を必死に伸ばす。

ぎりぎり届かずにボールはゴールに吸い込まれた。

大石がゴールへ走りボールを持ってすぐにセンターサークルに走る。

チームメイトに祝福される。

パスを出した小柳はすでに元のポジションに戻っている。

試合が再開される。

しかし横浜の攻撃は消極的で、横浜陣内でのパスが続く。

大石と永田がプレスをかけ続ける。

横浜DFのミスキックが大竹の足に渡る。

完璧なトラップでボールを自分の物にした。

左サイドの丸山にボールを渡し、全員が前に走る。

丸山が阿部にパスを出す。

阿部がトラップしテクニックを駆使し相手のディフェンシブミット  
フィルダー2人を抜く。

そのまま走りこむ永田にスルーパスを出した。

パスは永田に渡らずに相手DFがスライディングでブロックした。

こぼれ球を阿部が拾い、右サイドにパスを出す。

藤原がクロスを入れた。

大石が完璧なタイミングでジャンプしていた。

井原と競り合う。

大石はヘディングでスペースに落とす。

そのスペースに走り込む選手がいた。

小柳がディフェンスラインから走り込んでいる。

川口も前に出た。

小柳が右足インサイドでボールに触り、シュートモーションをする。

川口が小柳の足元のボール目掛け飛び込む。

小柳は空振りバックパスをする。

大竹がペナルティーエリア外で待っていた。

右足を振り抜く。

キーパーのいないゴールに突き刺さった。

小柳がボールを掴み走る。

あっという間に3 - 4の一点差まで詰めた。

この展開で前がかりにならないわけがない。

丸山が阿部に向けてパスを出す。

しかしボールは阿部がパスをもらおうとした場所ではない場所に出た。

井原がボールを拾い前線にロングパスを出す。

高めに出ていたディフェンスラインの裏に城が走りこむ。

ダイレクトボレーシュートがネットに突き刺さった。

3 - 5、再び2点差だ。

ゴールと同時に唐沖ベンチが動いた。

山井、丸山を木村、志賀と交代させる。

木村が下村の指示を告げる。

「大島が山井のポジション、阿部が大島のポジションに下がって、志賀が丸山のポジションに入る。フォワードは2トップ1シャドーで俺がシャドーに入って3 - 4 - 3にチェンジだ。後25分ある。逆転するぞ！」

いつもの木村からは感じられない、気迫があった。

試合が再開される。

志賀が一気に左サイドを駆け上がる。

阿部からのパスが通る。

志賀を誰も止めることが出来ない。

一気にペナルティーエリア内まで入り、シュートモーションに入る。

井原がシュートコースを消す。

志賀が構わず打ったが井原に当たりゴールラインを割った。

コーナーキックになる。

阿部が左サイドのコーナーアークにボールをセットする。

横浜はディフェンダーに加えディフェンスミッドフィルダー、フォワードが下がり、前線に残ったのは中村だけだ。

唐沖は北条と大島がファーサイドに、小柳、大石、永田がニアサイドに、木村がキーパーの前に、志賀がショートコーナーが受けられる位置にいる。

エリア内での位置取りが激しくなる。

相手DFが北条と小競り合いを起こす。

審判が相手DFと北条に注意する。

これからは誰がファールをしてもイエローカードが出る。

審判の笛が鳴り、阿部が蹴る構えになる。

ピッチにいる全員がボールが来た時に備える。

阿部が右足のインフロントボールを蹴った。

ボールはゴールに向けて大きく曲がる。

大石と井原が競り合うがボールは二人が飛んだ高さより高かった。



北条がフリーになっていた。

川口が慌てて飛び込むが間に合わなかった。

きつちりと頭に当ててゴールの中に入れた。

再び1点差にした。

横浜がセンターバックに代えて小柄なフォワードを投入してくる。

サイドハーフがサイドバックの位置に下がり、フォワードは唐沖と同じく2トップ1シャドーとなり4-3-3のフォーメーションをとる。

唐沖の3トップに対して4バックに、3バックに対して3トップにして人数的に優位に立ちたい、という意図なのだろう。

しかし流れは完全に唐沖に傾いていた。

井原がロングパスを大島がヘディングでクリアし、阿部がボールを拾う。

右サイドの藤原にパスを出し、藤原が大竹とのワンツーでドリブルする。

相手サイドバックと1対1になった時に木村にスルーパスを出す。

木村が相手ゴール正面でトラップし前を向く。

しかし、相手ディフェンシブミットフィルダーの足が後ろから木村の持つボールにかかるうとしていた。

木村が自らの足を触れさせた。

審判が笛を吹き、唐沖のフリーキックになる。

横浜の選手が抗議したが覆らない。

阿部と大竹の二人がフリーキックを蹴る構えをする。

横浜の壁は4枚、長身ディフェンダーが左から2番目に、井原がその右側に立つ。

阿部が再びボールをセットする。

阿部が助走をつけ、ボールを蹴った。

壁がジャンプしたがさらにその上を通す。

ボールは川口の手をかすめ、ゴール右隅に吸い込まれた。

ついに同点に追い付く。

しかしまだ唐沖の選手は満足していない。

ボールを抱えセンターサークルに走る。

しかし、横浜を勝ち越しを狙い、一気に攻めてくる。

フォワードとサイドバックを入れ替え、さらに攻撃に力を入れる。

入ったばかりのフォワードがドリブルで一氣に進む。

大竹がおもわず後ろから倒してしまうがファールはなく、ピッチの外にボールを出す。

下村が動いた。

永田に代え滝田を投入する。

「後5分だ！ 攻めきつて逆転するぞ！」

ボールが代わって入ったばかりの滝田に集まる。

滝田に対して井原がマークにつき、滝田へのパスをインターセプトしてロングパスを出す。

横浜の波状攻撃の始まりだ。

相手フォワードのシュートはバーに当たり、跳ね返った球を城がヘディング。

これを北条が身を投げだし防ぐがこぼれ球を拾えない。

コーナーキックになり大石が下がってくると北条が叫ぶ。

「前に張つてろ！ 絶対にお前に届ける！」

唐沖の守秘は決壊寸前だった。

しかしぎりぎりで防ぎつつける。

中村のミドルシュートが小柳に当たり、阿部の足元に転がる。

阿部がロングパスを大石に出した。

ハーフウェイラインを越えて大きくバウンドした球を大石がトラップし、唯一残っていた相手右サイドバックと1対1になる。

トップスピードで右に進む。

相手もそれにつられファール覚悟で突っ込んで来る。

相手の股の間を通し、一気に抜いた。

相手ゴールキーパーが前に出てくる。

大石は構わず右足を振り抜いた。

シュートは川口に当たり再び大石の足元に転がる。

大石が再びシュートを打とうとする。

しかし、後ろから相手ディフェンダーがスライディングしてきた。

大石はとっさに右にパスを出し、スライディングを受けた。

ボールは自陣から走って来た北条が利き足でない右足で狙った。

シュートは川口の股の間を抜け、ゴールの中に転がった。

遂に逆転した。

もう、横浜の選手に戦意は残されていなかった。

試合終了の笛が、鳴り響いた。

## 練習試合終了（前書き）

ダイブ 審判を欺いてわざとファウルを受けたように倒れること。

## 練習試合終了

審判の笛が鳴り響く。

試合終了と共に何人も選手が倒れ込む。

とても一試合を終えただけとは思えない光景だ。

チームメイトが肩をかし、手を差し延べ、立たせる。

試合終了後の礼が終わっていないからだ。

ピッチ中央に集まると、僅かな観客が拍手をくれた。

しばらく勝利の余韻に浸る。

そんな中最後にスライディングをしかけてきた相手のDFが大石に話しかけて来た。

「足、大丈夫か？」

「ああ、今はな」

「悪いな、試合になると熱くなっちまうんだ。俺、まつたなおし松田直志つつうんだ。よろしくな」

「ん、ああ」

松田が差し出して来た右手を握り握手をかわした。

「何やってるの？」

木村が現れた。

さっきの気迫は消え去り、のほほんとしている。

「てめえ、ダイブしやがって！」

松田が掴みかかるのではないかというぐらいの勢いで喋る。

「足、引つ掛かったもん」

「お前が勝手に引つ掛けたんだろっが！」

「それもサッカーでしょ？」

木村が全く気にせずのほほんと言う。

「なんてスポーツマンシップに欠けるやつだ」

大石は呆れ顔だ。

「松田<sup>マッ</sup>、何やってるんだ」

井原が松田を呼んだ。

「すみません、今行きます！」

松田が行く前に城ともう一人、今日の右サイドでプレーしていた男



が近づいて来た。

「9番、一つ聞いていいか？」

9番は大石の背番号だ。

「いくつでもどうぞ」

「最後のプレー　なんで4番のオーバーラップに気がついた？」

4番は北条の背番号だ。

「」

「しばらく試合しないんだ、教えても問題なしだろ？」

「無理っすよ城さん」

「波戸<sup>はと</sup>は口閉じてろ」

「じゃあなんで連れて来たんだ」

波戸は小さな声で文句を言う。

「北条は182センチあるけど50メートル5秒9で走れる。阿部がロングボール蹴った瞬間から走り出してた。あの時の阿部のロングボールのスピードと北条の足の速さなら俺の位置までならぎりぎり間に合うと信じたんだ」

「信じた　か。そんな不確定要素だらけの博打だったのか」

「そんなに分の悪い博打じゃないさ。仮に北条が間に合わなくても木村が走れりこんでた。シュートがキーパーやポストに当たっても阿部が蹴った時にはウチの選手みんな走り始めてたからだれか間に合ってた。中村にプレッシャーかけてた滝田も6秒1で走れるから間に合うだろうし、藤原も5秒8で走れるって本人言ってたし、志賀なんか5秒0で走れるからね」

「全部覚えてるんですか？」

波戸が驚いている。

「うん。サッカー部のチームメイトの身長、体重、瞬発力、跳躍力、持久力etc。まあ秘めてるポテンシャルはどこにも負けないよ」

「凄すぎ」

「ふ、ははは！」

城が笑い出す。

「城さん？ どうしたんすか？」

「ま、まさかこんな奴がいるなんてな！マジありえねー！」

「城さん！失礼すよ」

「だ、だってありえねーだろ！」

「もう すいません」

「いや、いいよ別に」

「俺、波戸孝弘はとたかひろって言います」

「俺は大石未華瑠」

「未華瑠君ですか。よろしくお願いします」

「ああ」

波戸と握手をする。

「波戸、城、さっさと行くぞ」

「あ、はい！」

「オーケー」

城と波戸が戻って行った。

松田もいなくなっていた。

唐沖の選手はバスに乗り込んだ。

勝利したが疲労からかバスの中は異常に静かだ。

しかし、行きでは前は生え抜き組、後ろはユース組というようにま

るで溝のように分かれていたのがなくなっていた。

進歩は少なからずあった。

「北条、どうだった？ 考え方、変わった？」

「勝たなきゃ意味ないってことに、やっと気がついた。いや気がついてないフリをしてきたのかもな。あいつら抜きでやらなきゃって気持ち先走り過ぎてた」

「気付いたなら、大丈夫だよ。ここから新生唐冲サッカー部の快進撃の始まりだよ」

「そうだな そろそろ渡辺わたなべと前田まえだも戻って来る。インターハイ予選、必ず突破してユース組と戦う切符を手に入れなきゃな、大竹と阿部のためにも」

## 抽選会

横浜ユース戦後の翌日は疲労を考慮して朝練なしになった。

久しぶりに登校時間ぎりぎりに学校に着くように家を出ると途中で石川と出会った。

大石と同じことを考えていたらしい。

「おはよう」

「うん、おはよう。凄かったね、昨日の試合。3点差をひっくり返すなんて」

「あのチームにはそれだけの力があつたから別にたいしたことじゃないんだけどね。最初から後半の戦い方に近い戦い方が出来るようになれば全国くらい簡単にいけると思うよ」

「それはちょっと言いすぎじゃない？」

「そう？」

「日本のレベルはそんなに低くないよ」

「石川はウチの実力を低く見すぎだよ。次の試合、どんな相手が来ても絶対に勝てる」

大石がそう言って笑う。

「いつもそう思ってる。負けるなんて思ってたら勝てないしな」

「そっか　そうだね。なんか、大石が言っとそんな気がするな」

石川が微笑む。

「どんな相手でも全力で勝ちに行くよ」

「うん、頑張ろうね。私達も全力でバックアップする」

「うん、ありがとう」

その後も石川としゃべりながら登校した。

そのせいか遅刻ぎりぎりで教室内に着いた。

自分の机の前に行くと、木村が大石の席に座っていた。

「木村　邪魔なんだけど」

「あ、ごめん」

木村が立ち上がる。

「そういえば、昼休みなんか予定ある？」

「いや、今のところないけど」

「じゃ、会って欲しい人がいるんだ」

「分かった」

昼休みになる。

木村に連れられなぜか玄関に連れて来られた。

「なんなんだよ　ここで誰か待ってるのか？」

「いや、そろそろ来るはず　あ、来たよ」

タクシーから二人、男が降りた。

一人はほどほどな流さの黒髪で身長が170弱の男。

もう一人は黒髪短髪で身長175センチ弱の男だ。

「木村！　久しぶり！」

身長が低い男が木村に声をかける。

「久しぶりだねー二人共わたしなへあいしや。紹介するねー。身長が低い方が2年生のディフェンダー渡辺藍星。えだとうむ高い方が1年生のミッドフィルダー前田刀夢。こっちが大石未華瑠」

木村が指差しながら教える。

「へえ、これがあの大石未華瑠　ね。前田っス。よろしく頼みますわ」

「渡辺藍星。渡辺でいいよ」

「あ、大石です」

二人と握手する。

「二人共海外に行つてたんだよ。これで2年生12人、1年生5人、サッカー部全員揃つたよ」

木村は嬉しそうだ。

「あの横浜ユースに勝つたんだってね　君なら強くしてくれると思つて急いで帰つて来たよ」

渡辺が笑う。

木村と同じく童顔で後輩である前田より年下に見える。

「ま、頑張ってくださいや」

前田がそう行つて校舎内に入つて行く。

「気、悪くしないでね」

「別に　慣れてるし、北条もこんなだったし」



その日の部活、選手はいつもの練習ではなく、大石や木村達の教室に集まりミーティングが行うことにしていた。

神奈川県高等学校総合体育大会兼全国高等学校総合体育大会サッカー大会神奈川県予選、通称インターハイ予選の抽選が行われるからだ。

抽選に参加したのはキャプテンの阿部、マネージャーの本間、そしてなぜか大石だった。

「なんで俺も来なきゃなんだ？」

大石は不満そうだ。

「いたら相手ビビるかと思って」

阿部はいつもと変わらずぼそぼそ喋る。

「本当は不安なんだと思いますよ」

本間が小さな声で言う。

本間は滝田以外の人間には常に敬語を使う。

「不安？ あいつが？」

阿部はすでに先に行っている。

「サッカーだと凄いですけど、普段は消極的で目立ちたくないか

らきつとこういう場、嫌いなんだと思います」

「俺を頼りにされてもな ま、いいけど」

抽選会の会場に着くと、抽選の準備をしている段階だった。

「どうやって対戦相手選ぶの？」

大石が阿部に聞いたが、阿部はめんどくさそうな顔をして本間の方を向いた。

本間が代わりに答える。

「神奈川は今年、出場校数が全部で190校あってそのうち7校が1次予選をシードされています。で、残りの20～21校×9ブロックのトーナメント戦を行って、各ブロック1位が2次予選へ行けます。2次予選は1次予選を勝ち抜いた9校とシード7校の計16校によるトーナメントです」

「そんなにチームいるの？」

「神奈川は学校自体多いので でもだいたい上位に食い込んでくるチームはシードされてる7校のうち4つなんですけどね。そこだけ強さが別格で、神奈川4強なんて言われています あ、センスないと言わないでくださいね、私が考えたんじゃないので」

「あ、うん ま、その4チームを倒せばいいんだ」

「しばらく先のことだね」

阿部が口を挟んだ。

「1次予選で強いチームはどこ？」

「かたはまこうぎょう片浜工業高校ともりやまこう森山高校」

阿部がそこまで答えたが後はめんどくさそうな仕種を見せる。

「どんなチーム？」

なので代わりに本間に聞く。

本間は嫌な顔一つせずに話し始めた。

「片浜は攻撃が、森山は守備が凄いですよ。昨年のインターハイ予選は1次止まりでしたけど片浜は5試合18得点、森山は5試合無失点で2次予選まで行ってますから」

「まあそれでも1次予選レベルだけだね」

再び阿部が口を挟む。

「抽選始まるよ」

阿部がくじを引く番になった。

阿部が右手をくじ箱に手をつ込み、紙を一枚取り出す。

「Bの2番!」

相手がまだ決まっていない場所だ。

次に引くのは森山高校だ。

「Bの18番!」

森山高校と同じ組になってしまった。

その次は片浜高校が引く番だ。

「Bの4番!」

片浜工業と同じ組になった。

辺りが少しざわつく。

「死のグループってやつか?」

大石が本間に耳打ちする。

「そうかもしれません 他の組よりは厳しいですが」

「ですが?」

「ここでつまづいていたら全国出場なんて夢のまた夢に終わってしまいますよ」

「ま、そうだね。1次予選だし」

ちょうどその時唐沖の対戦相手が決まった。

「塚野浦高校？<sup>つかのうらひこう</sup> 聞いたことある？ 強い？」

「聞いたことあるんですが ごめんなさい、思い出せません」

本間がうなだれる。

「いや、別に謝ることじゃないから。それに相手が誰だって勝たなきゃだしな」

その時から後ろから嘲るような笑いが聞こえた。

「勝たなきゃ？ 勝つつもりなのかよ！？」

ニキビが顔を覆う男が後ろにいた。

塚野浦高校の選手なのだろうか。

「うちはお前達をよく知る人間がいるんだぜ？ 斎藤先生がよ！」

「誰？」

「今年の唐沖のサッカー部の顧問ですよ。そっか、それで聞いたことあったんだ」

「お前らみたいな雑魚サッカー部、蹴散らしてやるよ」

男の言葉に本間がキレかけ、反論しようとしたが大石に止められた。

「やめとけ、本間」

「大石さん　なんでですか!？」

「相手にするだけ無駄だよ、試合になったら鬱憤晴らすから、ちょっと我慢な」

本間は不満そうだが、頷いた。

阿部が電話で抽選結果を学校に残っていたメンバーに伝える。

「何めんどくさいグループ引いてるのよ!」

電話から漏れるくらいの音量の声は岡本しかいないからすぐ分かる。

「　　すまん」

阿部が素直に謝っている。

阿部の耳元の電話から僅かに聞こえる音からすると他の人間が岡本をなだめているようだ。

くじは運なのだから岡本の怒りは理不尽なような気がする。

「瀬恋ちゃん　」

本間は呆れている。

「じゃあ、今から帰るから」

阿部が一方的に電話を切った。

## やって来た男達

学校に帰ると小柄な男と大柄な男の二人組が、まるで大石達が帰って来るのを待っているかのように、校門前に立っていた。

「お、やっと来たね」

小柄な男が近付いて来る。

「久しぶりだね、阿部」

小柄な男はなぜかニヤついている。

「ああ、一年と一ヶ月ぶりだ」

「懐かしいなー、この校舎。棚橋<sup>たなはし</sup>がぶっこわした電気のスイッチそのまま？」

「何しに来た、漆原<sup>うるしはら</sup>」

阿部が質問に答えずに漆原に聞く。

「別にたいしたことじゃないよ。ただ決勝で戦うことになったから気になって見に来ただけ」

「まだ1試合もしてませんけど」

「横浜ユースに勝ったチームが1次予選決勝までこないわけないでしょ？」



「なんで知ってるんですか？」

「内緒」

本間に聞かれた漆原は笑いながらそう答えた。

「お前らは勝てんのか？」

「俺らはこんなところで負けられないよ」

漆原が笑う。

「ところで そこの外人さんは1年生？」

今まで黙ってた大柄な俺が本間に聞く。

大石くらいの背の高さだ。

「転入生の大石未華瑠君です。日本人ですよ」

「へえーごめんね、大石君。俺、漆原隆也。うるしはらたかや こっちのでかい奴が梅うめ沢司。ざわつかさ 決勝よろしくな」

そう言つて漆原が笑う。

「うちの守備からは6点もとれないからさ、君も覚えておいたほうがいいよ」

二人は帰っていった。

「あの二人、何者？」

「二人共私達の同級生だったんです　この学校に通ってて、二人ともサッカー部でした」

「そうなの？」

「森山高校の4バックは全員唐冲生で、あの二人はセンターバックなんです」

「俺らがまだユースだった時な」

「じゃあ知り合いなんだ」

「友達だったよ、サッカー関係なくね」

阿部が先に校舎に入る。

「阿部君、漆原さんが結構淋しがってたみたいなんです。だから内心嬉しいんですよ」

「感情の起伏が見えにくい奴だな　」

大石達の教室に入ると、ミーティングの途中だった。

今日は職員会議のため下村がいない。

「遅いよ三人共！ 何してたの！？」

岡本が教壇に立っている。

黒板にはフォーメーション図が書かれている。

「校門の前で漆原達に会った」

阿部がそう説明すると岡本の表情が変わる。

「あいつら、来てたんだ」

「4人共、全員か？」

北条が本間に聞く。

「漆原さんと梅沢さんだけです」

「そうか」

チーム全体の雰囲気が悪くなる。

「ま、次の試合勝たないとあいつらと戦えないし、次の試合、頑張りますよ！」

岡本がわざと明るく振る舞っている。

「はい、阿部達も座って、ミーティング再開するよ！」

ミーティングは初戦の相手の話題になる。

「斎藤のチームか 絶対に勝ちたいな」

北条が呟くようにぼつりと言った。

「斎藤って誰なんだよ？」

「前のこの学校のサッカー部顧問だった人らしいです。俺達1年は知らないけど」

大島が大石に説明する。

「無能だった」

永田の言い方はいちいち辛辣だ。

「人間的にも教師としても指導者としても」

「いくら事実でも言い過ぎだろ」

小柳の発言を丸山が注意する。

「まああのサッカーは流行ってるからな。あいつだけがやってるわけじゃないし」

「流行ってるって、どんなサッカー？ どんなチームにしたんだ？」

滝田の言葉に対して大石が質問する。

「走るサッカー」

「走るサッカー？」

「イビチャ・オシムって知ってる？」

「ユーゴスラビア代表の最後の監督」

木村の問いに大石が答えると渡辺が説明の続きを喋り始めた。

「うん、その人。その人が日本代表の監督になってからメディアに出て来たのは『考えて走るサッカー』。後は 全員攻撃、全員守備、つまりハードワークかな？ で、ほとんどの指導者はオシムに右に倣えしたんだよ」

「まずいのか？ 別にいいと思うけど」

その大石の問いには坪谷が答える。

「オシムのサッカー自体はいいんす。けど大多数の日本人は自分で答えを見つけるって発想が欠落しているんす。だから」

「オシムのサッカーをマスコミが『走る』だけ強調したせいで日本全体で走れない選手は使えないと刷り込まれて、一部の指導者は選手をひたすら走らせるようになったんです。それにオシムは攻撃的なディフェンダーと守備的なフォワードを起用したんで、指導者もそれを模倣しました」

「それで斎藤はうちのチームでその『走るサッカー』をしようと

した」

坪谷の言葉に藤原、小柳が続く。

「でも、上手いかなかった。試合前に走らせるんだぜ？ 試合で走れなくなるのは当たり前だ」

「斎藤は試合に勝てないのは走り足りないからって、さらに走らせた。悪循環だったな」

「藍星怪我した、そのせいで」

「で、危ないからサッカー部に新しい先生呼んだの。それが下村監督」

津田、滝田、大竹、木村が締めた。

「で、斎藤って人はあの高校に行ったんだ」

「そゆこと」

「で、斎藤のやり方が変わってなければ、簡単に勝つ方法がある」

大石がそう言うのと皆頷いた。

言わずとも、理解しているようだった。

ミーティングが終わり、みんなが帰って行く。

大石は石川、滝田、本間、丸山、小柳、津田、大島、藤原と共に帰る。

「じゃあね」

木村達とは校門で別れた。

全員自転車で漕ぎ続ける。

「なあ、なんで漆原って奴のこと聞いた時、なんでみんな黙ったんだ？」

「あいつらは俺達を裏切ったんだ」

小柳が答えた。

「裏切った？」

「漆原達4人も鈴木先生の元で練習を積み、そして成長していった。唐沖のスタメンの4バックだったんだ。けどあいつらは俺達と鈴木先生の指導が正しかったって証明するって決めた翌日、森山高校を推薦で受験したんだ」

津田が説明してくれた。

「森山高校は神奈川県内のダイヤの原石を見つけて磨くチームなんだよ。強豪ってわけじゃないからそうしなきゃいけないって面もあるけどな」

滝田がさらに説明する。

「それで、裏切りか」

「だから、あいつらには負けるわけにはいかないんだよ  
間違っただけで証明するためにも」

俺達が

丸山の気持ちと言葉の端々に見えかくれする。

「なるほどね」



## ハードワーク（前書き）

マーク 守備時に相手選手に張り付くこと。マークを行っている守備の選手をマークー、マークすることをマーキングと呼ぶ。

カウンター 攻め込まれていた側がボールを奪った際、相手チームの守備の体勢が整わないうちに素早く相手ゴール前にボールを運び攻撃する戦術

## ハードワーク

塚野浦戦の当日になった。

午前十時、唐冲高校のグラウンドでBグループの第1回戦が行われる。

唐冲は1試合目だ。

現在両チーム共アップを行っている。

アップ前、塚野浦のコーチの斎藤が挨拶にやって来た。

「ずいぶんお若い監督で 問題児ばかりでさぞかし大変でしょう?」

斎藤は人を馬鹿にしたような喋り方をしてくる。

「そうでもないですよ。くせが強くてももしろい素材ばかりです、きちんと活かすと素晴らしいチームになりますよ」

下村がニコリと笑いながら握手をかわす。

見事に挑発している。

斎藤の顔が怒りのせいで赤くなり、自分のチームの選手を怒鳴りちらしていた。

試合開始直前、久保と鶴巻がやって来た。

「どうしたの？」

「あんた達の応援に来たの、どうせ誰も来てないだろうからさ」

確かに少ない観客にも関わらず、唐冲の応援をしてる人はいない。

「ってまあそれはオマケで、本当はどのくらい大石が上手くなったか見に来ただけだね」

「あ、そう」

大石は大して興味なさそうに答える。

「じゃ、頑張つてね」

久保と鶴巻が立ち去った。

試合が始まる。

唐冲ボールで試合が始まった。

塚野浦は予想通り、よく走り、ハードワークを心掛けていた。

唐冲はそれに対してボールを回し、パスを中心にして攻め立てた。

すぐにその効果が出て来る。

相手はボールを持っている選手にプレスをかけるが、すぐにはパスするので全くつかまらない。

別にゴールに繋がるようなプレーでもないのに、相手の選手は焦り始めていた。

藤原にパスが渡り、藤原がこの試合ドリブルで一気に駆け上がる。

相手の焦りがパニックに変わった瞬間だった。

藤原が相手の左サイドの選手を簡単に抜くと、相手選手が二人がかりで止めに来る。

藤原がその二人も抜くと、相手選手が後ろからユニフォームを掴んで倒してしまった。

唐沖のフリーキックになる。

キッカーは阿部だ。

審判の笛が鳴り、阿部が右足を振り抜く。

阿部の蹴ったボールは大石の頭の上めがけてピンポイントでやって来た。

普通なら届かない場所だったが、大石がジャンピングボレーで決めた。

あっという間に先制する。

斎藤が真っ赤な顔で怒鳴りながら、指示を出す。

ポジション変更で抽選会の時にいたニキビ面の男が大石をマークした。

他にも永田と阿部にもマークがつく。

「マンマークか」

「もうお前らの好きにはさせねえよ。お前らより走りきって、お前らを封殺してやる」

「それがお前らのハードワークか　　ってかさ、なんでお前らはあの監督に感謝してるんだ？」

「あの人が監督になってから8戦無敗なんだよ、特にここ2週間は6連勝だ。あの人のサッカーのおかげでな」

「そうか　　可哀相にな」

「は？」

「とりあえず見せてやるよ　　俺のハードワーク」

大石がそう言うのと、ボールを持っていた大竹にパスを要求した。

大竹が大石にパスを出す。

トラップし、ゴールの方を向く。

ニキビ面が大石との間を詰める。

股抜きで簡単に抜いてゴールキーパーと1対1になる。

一つ簡単なフェイントを入れると相手ゴールキーパーは簡単に抜けた。

がら空きのゴールにボールを転がし、2点目を決めた。

戻り際に大石がニキビ面の男に話し掛ける。

「これが俺のハードワークだ」

「これのどこがハードワークなんだよ」

「ハードワークっていうのはいかに自分のチームに貢献するかということだ。だからフォワードの一番のハードワークは得点、ディフェンダーの一番のハードワークはいかに失点を減らすかということだ。ただ走ってるだけじゃ駄目なんだよ」

その後の試合は一方的に進む。

前半に大石がニキビ面の男を振り切り、3点目を決め、阿部がフリーキックを直接決め4点目、後半にコーナーキックから山井、北条、永田が決め、カウンターから藤原が決め試合終了10分前に8-0になっていた。

久保と鶴巻以外の観客は黙ってしまっている。

「圧倒的だね、流石は大石。このチームをここまで強くするなんて」

久保は嬉しそうに笑っている。

「このチームに一番必要だったのは味方を信頼するってことだけだったから、大石には楽な仕事だろ」

鶴巻の表情は暗い。

「まあ、そうなんだけどさ、ここまで変わるとは思わなかったな。大石自身も凄い成長してるし」

「ああ　こんなところで才能を潰すべきじゃない」

「まだ言ってるの？」

久保が呆れたような表情になる。

「当たり前だろう　プロからのオファーを断ったんだぞ」

「あいつがこれを選んだから別にいいじゃない。全国優勝すれば無駄にはならないし。鶴巻も手伝えば？」

「俺はもうサッカーを辞めたんだ。足手まといになるだけだよ」

「少なくとも大石はそう思ってないよ、きっと」

主審の笛がなった。

「あ、終わったね。行こう、鶴巻」

「ああ」

試合は終了前10分間で疲れて完全に足が止まった塚野浦から4点追加し12-0で唐冲が勝利した。

試合終了の瞬間、塚野浦の選手は呆然としていた。

「なんで俺達がお前らに負けるんだ」

試合終了後の礼が終わり、大石の後ろにいたニキビ面の男がぶつぶつと言っている。

「最初からウチを弱いと決めつけて、知ろつともしなかったお前らが勝てるわけないだろ。それに――」

大石が男の方を振り向く。

「全員自分のペースをつかめない奴ばかりなんだ、スタミナが切れるのは当然だ。試合をする前からお前らに勝ち目なんかなかったんだよ。だいたいな、2週間で6試合なんて試合し過ぎなんだよ。体に負担かかり過ぎる。お前ら、よく怪我人出なかったな」

「怪我人は出てたけど結果が出てたから気にしな



かった  
」

「やっぱりな。そんな無茶な練習して試合に挑めば当然負けるだろ」

「次は、負けない」

男は走り去った。

森山高校（前書き）

ツインタワー 身長が高いフォワードでツートップを組んだフォ  
ーメーションのこと。

ワンハンドキャッチ シュートを片手でキャッチすること。

ロングボール ロングパスのこと。

## 森山高校

一回戦を12 - 0で快勝した唐沖は2回戦の片浜工業高校を1点に押さえ、8 - 1で勝利、そのまま3回戦も7 - 0で勝利。

現在、森山高校のグラウンドで準決勝の相手の用命高校もちめいこうとの試合を行っている。

しかし、残り5分で3 - 0とほとんど勝利を手中におさめていると言える。

相手のサイドミットフィルダーが苦し紛れにセンタリングを上げる。相手フォワードが北条のマークを外し、フリーでヘディングシュートを放つ。

ボールは坪谷の手をかすめ、ゴールに吸い込まれるように入った。残り5分で1点を失ったが、唐沖ディフェンダーは慌てはしない。きつちりと攻撃を跳ね返し、3 - 1で勝利した。

試合終了後、森山の選手達とすれ違った。

漆原と梅沢、そして別な二人の男が話し掛けてくる。

二人共175センチくらいで一人は黒髪で短髪、一人は茶髪で短髪だ。

「おめでとーございますってか」

茶髪のほうが冷やかすように言う。

「やっぱり決勝まで来たね、俺の予想通り。だから言っただろ、川嶋」

「黙るか死ぬかしろよ」

漆原が黒髪の男の肩を叩くと男は吐き捨てるように言う。

「なんだよ、つれないな。あ、大石君は二人知らないんだっけ。茶髪が棚橋天人、黒髪が川嶋響。二人共サイドバックだよ」

漆原が丁寧にポジションまで説明してくれる。

漆原達は森山のキャプテンに呼ばれ、その場を去って行った。

もう一つの準決勝が始まるうとしていた。

唐沖の選手達の内大石、大竹、丸山、坪谷、本間の5人は決勝戦の対策のため、試合をすぐ近くから見ると。

試合が始まるまえに円陣を組んでいる。

「相手のゴールキーパーはでかいね、誰？」

森山のゴールキーパーがゴールの前に立つと対比でゴールが小さく

見える。

「きしまりゆうた木島竜太、森山中学出身の1年生で身長は2メートル近くあるそうですね。神奈川だけじゃなくて日本でもあのサイズはいないでしょうね」

本間が詳しく説明してくれる。

「森山中学ってことは、坪谷の同級生か？」

丸山の問いに坪谷は静かに頷く。

「全然違うね、同じ歳なのに」

大竹が冷やかすように言う。

坪谷は黙ったままだった。

「牛乳飲まないからな、お前は」

「日本人には酵素がないので、牛乳飲んでも栄養摂取出来ないそうですよ」

大竹が冷やかすのを遮るように、本間が雑学を披露する。

「へえー」

丸山がボタンを叩くように手で腿を叩く。

「古いよ、そのリアクション」

大竹は呆れ顔だ。

試合が始まった。

「森山は4 - 4 - 2のシステムで、背の高いフォワードを二人並べたツインタワーです。守備を固めてカウンターを仕掛けるのが得点パターンです」

森山は確かに守備型のチームのようで、ピンチらしいピンチもないが、チャンスらしいチャンスもなく、ボール保持率は相手のほうが高い。

左サイドバックの川嶋がボールをインターセプトした。

そこから一気にカウンターを仕掛けた。

川嶋を誰も止めることが出来ずに、簡単にセンタリングを上げられる。

センタリングの精度は悪く、ニアサイドにいた森山の長身フォワードには届かなかったが、たまたまファーサイドにいたもう一人の長身フォワードがヘディングシュートを決めた。

「川嶋はテクニクはアレですけど 足の速さとフィジカルの強さを併せ持つ左サイドバックです。強引にボールを奪う守備も得意ですよ」

本間が説明する。

森山は先制してから守備の時間が長くなる。

しかし、センターバックの梅沢と漆原のコンビがことごとくボールを跳ね返す。

「梅沢は空中戦、漆原はスピードがウリのセンターバックです。二人で互いの弱点を補っています。右サイドバックの棚橋は豊富なスタミナと衰えないスピードで右サイドを走り続けます」

相手はなかなかシュートまでいけず、焦りと苛立ちが表情に出ている。

相手フォワードがミドルシュートを放つ。

まぐれなのか、ゴール右隅にぎりぎり入るくらいのシュートになったが、木島はゆっくりとした動きで飛び込んでワンハンドキャッチしてみせた。

立ち上がって前に蹴り出すと、ハーフウェイラインを大きく越えたところでバウンドして相手フォワードがトラップする。

相手は攻撃に人数をかけすぎて守備がおろそかになっていた。

森山のフォワードが強引なドリブルで前に進む。

相手ゴールキーパーとの1対1を決め、2 - 0とリードを広げた。

「こうやって守りながらコツコツ点を取って勝つのが森山の基本的な戦法です。今年は木島が入ったことでカウンターがさらに鋭くなったようですね」

「相変わらずつまらないサッカーだな」

丸山が吐き捨てるように言う。

「こたわった結果だろ、勝利に」

大竹は試合を食い入るように見ている。

「めんどくさいな、とりあえず。あんなに守備固いと」

相手は攻めあぐねている。

前線にロングボールを入れるが梅沢にクリアされ、カウンターが始まる。

「あのカウンターなら北条達なら止めてくれるでしょ、なあ大石」

丸山が大石に話をふる。

だが、大石は黙っている。

少し前、石川の話をしたことを思い出していた。

『それはちょっと言いすぎじゃない?』

『日本のレベルはそんなに低くないよ』

「甘く見すぎてたかも」



「何がですか？」

本間が尋ねたが大石はごまかして答えなかった。

## 過去

神奈川県高等学校総合体育大会1次予選Bグループ決勝戦は圧倒的な攻撃力で決勝まで上がって来た無名の唐沖と鉄壁の守備で相手を零封しながら勝ちあがってきた森山高校の対戦となった。

決勝戦前日、唐沖高校は翌日に疲労を残さないように軽目の練習で汗を流している。

フリーキックやコーナーキックといったセットプレーの練習も行っている。

ペナルティーエリア脇から、阿部センタリングを入れる。

ゴールキーパーの坪谷は飛び出さず、ディフェンダーに任せだが、大石がフリーでヘディングシュートを狙う。

ボールは坪谷の右手をかすめ、ゴールに吸い込まれた。

坪谷が北条に怒鳴られる。

セットプレーに限らず、サイドからのセンタリングは唐沖の弱点になっていた。

片浜工業高校戦はコーナーキックからの守備陣の連携ミス、用命高校戦はサイドからのセンタリングを合わせられて失点している。

練習が終わり、グラウンドを整備する。

大石は、叱られてしょんぼりとしている坪谷に話し掛けた。

「まあ、気にするな　守備の連携はすぐに出来るわけじゃないかな」

「でもあいつなら――木島なら、簡単に止められるんす」

「木島って、森山のゴールキーパーか？　まあ同級生だったんだから張り合う気持ちもわからなくもないけど」

「俺はいつも、木島より一歩先に行ってたす。サッカーも身長も俺は木島に勝ってたす。でも中2の時からあいつが急に身長が伸びだして、立場が逆転したす。それまで俺がいたゴールキーパーのレギュラーはあいつに取られたす。俺がこの学校に来たのは、いつまでも木島のリザーブ、控えになるのが嫌だったからす。だから俺は次の試合、勝ってあいつより上だって証明したいんす」

「証明　ね」

大石が複雑な表情になる。

「ま、悪くないけどな、そういうネガティブな感情」

「え？」

「『ネガティブは時にしてポジティブに勝る』って言ってたし」

「イングランドの諺かなんかつすか？」

「いや、久保が言ってた。でも真実だ。コンプレックスや挫折をバ

ネに人は強くなるから」

「強く　なってるといいんすけど」

坪谷は不安そうだ。

着替え終わり、大石が阿部、木村、大島、藤原、石川、岡本の6人と一緒に校門に行くと、棚橋、川嶋、漆原、梅沢が立っていた。

「お前達、わりと暇なんだな」

「まあな。どうせ試合前の練習なんて休み同然だし」

棚橋が答える。

「それより唐沖の練習見てたほうがいいかなって」

梅沢がニコリと笑う。

「面白そうな練習してたね、阿部」

「　まあな」

「あんな練習だったら俺達も残れば良かったかな」

「勝手に出てったくせに　いまさら何言ってるのよ!」

岡本がそう言くと、岡本が殴りかかろうとする。

阿部と木村が必死に止めると、柵橋が声を出して笑った。

「何が可笑しいの!？」

「いや、それもそうだなって思ってたさ。ま、頑張ろうや」

柵橋が右手をひらひら振って歩き出した。

梅沢もそれについて行く。

大石達も駐輪場に向けて歩き出した。

「何なのよあいつら！」

「そんな怒るなっ」

「怒らないでいられるかっての！ もう、大石、明日ケチヨンケチヨンにしてやってよ！」

「今日びケチヨンケチヨンなんて言わないだろ」

阿部が呟く。

「なんで俺なの？」

「あいつら、大石のプレーまだあまり見てないでしょ？ 大石のこ  
と知らなかったって奈由未が言ってたし」

「いや、俺のこと一目見ただけで外国人って言ってたから、ちょっ

とは知ってるみたいけど？」

「それに、知ってても知らなくても、あいつらは1試合見たらすぐに対策出来るだけの力があるでしょ」

木村がいつも通りのんびりとした口調で喋る。

「あいつら自身を認めなくても、実力は認めなきゃ」

岡本は黙ってしまった。

木村、岡本、阿部と別れ、4人はまだ明るいい中、黙って自転車を漕いでいた。

「石川、ちょっと聞いていいか？」

大石が隣にいた石川に尋ねる。

「何？」

「なんで岡本はあんなに怒ってるんだ？ 岡本だけじゃない、丸山や小柳も結構怒ってたし いくら別な高校行ったからって、あんなふうにはならないだろ？」

「あ、それ俺も気になってたです」

藤原が石川の後ろから声をかける。

「北条さんとか、なんかやたら前の監督にこだわってましたからね。あのサッカー部に何があったんですか？」

大石の後ろから大島が聞く。

「うーん 結構プライベートな話だからな」

「駄目か？」

大石が石川の顔を覗き込むように見る。

「えっと まあいいか」

石川はそう言って話し始めた。

「塚野浦と試合したとき、塚野浦の監督が『問題児ばかりでさぞかし大変でしょう？』って言ってたでしょ？」

「ああ、うん言ってた」

「思い出せてないんですね、大石先輩」

「うるせ」

大石が急ブレーキをかけ、大島にぶつかりに行く。

「危ねっ！ ってか仕返しがしょぼいんですけどー！？」

「 続き話していい? 」

「 どうぞです 」

藤原が先に進めさせる。

「 あの人が言ってたこと、ホントなの 」

「 ホントって ? 」

「 うーん いわゆる不良って奴、かな。サッカー部にはそういう人が多いの。北条とか滝田とか 瀬恋もね。結構グレてて、他の教員もお手上げだったんだけど、木村達がサッカー部に誘ってくれて、鈴木先生がひたすら個性を伸ばしてくれたの。ここら辺は木村から聞いたんだっけ? 」

「 その人の教えを受けた人だけで勝とうとしたんだって言ってたけど、木村達がサッカー部に誘った云々ってのは知らないな 」

石川達に追い付いた大石が答える。

「 そっか 言ってるんだ 」

石川が呟くように言う。

「 うちのサッカー部ね、木村達を作ったの。入学した年にね 」

「 じゃあウチのサッカー部に3年がないのは―― 」

「 最初っからいなかったの。その時1年生、つまり私達の学年なん



「ただ、それが川嶋達も含めて17人しかいなかったんだ。それに練習がきついつて去年川嶋達以外にも4人辞めて、11人になっちゃたから、今年1年生や大石達が入って来なかったら結構やばかったんだ」

石川が苦笑いする。

「それでも、みんな木村や鈴木先生に感謝してたから、なんとか残ってサッカー続けてたの」

「感謝　ですか」

「うん。みんな、教師に見捨てられてた人ばかりだから。悪さはしてなかったけど、丸山や小柳も教師から見てもあまりいい生徒じゃなかったし」

「他の奴らは？　山井とか渡辺とか永田とか」

「渡辺と永田は友達だから助けてやるって言ってたし、山井はあの人、全然喋らないからあまり詳しくは知らないけど、イジメられてたのを木村が助けてあげたみたい。だからサッカー続けて、木村の役に立ちたいって思ってるんじゃないかな」

「で、森山の選手達とどう繋がるんですか？」

藤原が尋ねる。

「川嶋や棚橋達も結構不真面目な生徒で　特に棚橋は警察のお世話になるくらいね。そんな時にサッカー部に木村達が誘って、鈴木先生があいつらの個性を伸ばしてたの。それなのに、私達の敵に

なるのが許せないんだと思うよ」

石川が暗い顔をする。

「石川は、あいつらのことどう思ってるんだ？ 岡本達と同じで許せないと思ってるのか？」

大石が石川に尋ねる。

「私は 分からない」

「分からないって、どうしてです？」

藤原が不思議そうに聞く。

「許せない気持ちより なんだか分からないけど、喪失感っていつか、なんかそんな感じが ごめん、良く分かんないよね」

「いや、なんとなくですけど分かりますよ。俺もコース辞めて仲間がいなくなった時はそんなでしたから」

大島が答える。

「そういう相手と戦うのは 正直辛いんですよね」

「うん でも、戦わなきゃいけない」

石川の顔が引き締まる。

「私達は ピッチで試合するわけにはいかないから、皆に託すし

かないの。皆 勝ってくれる?」

「勝つさ」

大石が即答する。

「あいつらにはこんなところで立ち止まるわけには行かないんだ」

「そうです」

藤原が続き、大島も黙って頷く。

「ホント、頼もしいね」

石川が微笑んだ。

その頃、棚橋、川嶋、漆原、梅沢の4人は森山高校へと歩いていった。

梅沢の手にはビデオカメラが握られている。

「ま、色々撮れたし、成功かな?」

「大石って奴のプレーもじっくり見たかったけどね」

「あの帰国子女、そんな凄いのか?」

棚橋が梅沢に尋ねる。

「イングランドの日本人が万年最下位の弱小チームをサッカーの大会で優勝させたって話、知らないのか？」

梅沢ではなく、川嶋が答える。

「ああ、インターネットの掲示板に出てたやつだろ？ あれ、デマつつつか都市伝説みたいなモンだろ？」

「まあ、あの話は大袈裟だけど、あながち嘘ではないんだ。何年もかけてチームを強化し、チームを優勝候補の一角まで成長させた。メンバー表みれば分かるよ。ミゲル・オオイシなんて名前、多分イングランドであいつ一人だよ」

「大石には気をつけなきゃだね」

「まあ大丈夫だろ 唐沖には致命的な弱点がある。俺達は負けないんだ 鈴木先生のためにも」

## 1次予選決勝（前書き）

セットプレー      フリーキック、コーナーキック、ペナルティーキックの総称

サイドアタック      サイドから攻める戦術

トップ下      オフェンシブミッドフィルダーのこと

セントラルミッドフィルダー      4 - 4 - 2などの中盤を1列で構成したときに中央に配置されるポジション。

攻撃的MFと守備的MFを兼ねるようなポジションで攻守両面にわたる総合的な能力と豊富な運動量を求められる。

ボランチ      セントラルミッドフィルダーのこと

今度からディフェンシブミッドフィルダーをボランチ、オフェンシブミッドフィルダーをトップ下と表記します。

## 1次予選決勝

神奈川県高等学校総合体育大会1次予選Bグループ決勝戦当日を迎えた。

唐冲サッカー部の面々は皆試合会場となる私立三笠高等学校を目指していた。

「ってかさ、こういう時って普通バスじゃね？」

渡辺、志賀、山井と共に自転車を漕いでいた前田が文句を言う。

「いいアップになっていいんじゃない？」

志賀がそう答えても前田は不満顔だ。

その会話の途中、渡辺も山井も黙っている。

もつとも、山井の場合はいつものことではあるが。

「ずいぶんと静かだな、先輩達」

「緊張してるんでしょ、因縁の相手らしいし」

「あんまり私情挟むと勝てる試合も勝てなくなるつつうのに」

前田は心配そうな表情になる。

「ま、お前の場合試合に出れるかを心配した方がいいと思うけど」  
志賀が前田に聞こえないように、静かに小さな声で呟いた。

小柳が自宅のドアを開けると、自転車に乗った丸山が待っていた。

「野郎に朝早く起こしに来てもらってのは味気ないな。こういう時は幼なじみの美少女に」

「漫画の見すぎだろ」

丸山がそっけなく答える。

小柳が大きな欠伸をする。

「また夜更かしか？ 今日の試合のこと忘れてたってか？」

「なかなか寝付けなくてな 決勝戦だし、なによりあいつらとの試合だからな」

小柳のその一言で丸山の表情が変わる。

「あの4バックの凄さは共に切磋琢磨してきた俺達ディフェンス陣が一番よく分かってるつもりだ」

小柳もようやく自転車にまたがる。

「だからと言って、俺達を裏切ったあいつに負けるわけにはいかないだろ」

丸山の顔と声から苛立っているのが分かる。

「ああ、分かってる。俺はこんなところで負けるわけにはいかないんだ」

二人は、静かにペダルに力を入れた。

その頃永田もまた、家から出るところだった。

しかし小柳とは異なり、サッカー部員は誰も待つてはいなかった。

代わりに、彼を見送る一人の女性がいた。

「いつてらっしゃいませ、怜来様」

永田がこくと頷きながら靴を履く。

「その　あまりご無理をなさらないように」

女性は心配そうな声と表情になっているが、永田は何も返事をしないでドアを閉め、車に乗り込んだ。

「良いのですか？　返事をしないで」

運転手の男はアクセスを踏むと同時に聞いた。



「無理をしないなんて無理だから　あの時から出来ない約束はしないことにしてる」

いつも無表情な永田が悲しそうな顔になる。

「そつでございますか　申し訳ございません」

男もまた悲しそうな顔をした。

「いや、気にしないでくれ。今日はちょっとだけ、別なことを考えていたかったから」

永田はそう言ったきり、目をつむり、男も再び話し掛けることはなかった。

木村がシャワーを浴び終わると、彼の母親が「友達が呼びに来たよ」と教える。

「うん、分かった」

木村はそう返事すると、ユニフォームに着替え、玄関に置いてある道具一式が入ったバッグを肩にかけ、ドアを開けた。

「ごめん岡本、遅くなった」

「まだ髪乾ききってないじゃん、ちょっと待ってなさいよ」

岡本はそう言つてタオルを取り出し、木村の頭を拭く。

「ちょ、ほつといたら乾くつて」

「じつとしてなさい！」

岡本に少し強い語調で言われ、素直に従う。

「今日の試合、絶対勝つてよね！ あいつらだけには負けるわけにはいかないんだから！」

「努力するよ」

「努力じゃなくて絶対」

そこまで言つて、岡本はしまった、という顔になる。

「ごめん」

「そんなに気にしなくてもいいから 終わった？」

「あ、うん」

岡本が拭くのをやめ、手で軽く整えた。

「サンキュ。じゃ、行こうか」

石川、滝田、本間の三人は大石の家に来ていた。

ドアホンを押すと、起きたばかりの大石が出て来た。

「まだ着替えてなかったのかよ！」

「早くしないと、遅れますよ」

滝田は焦り、本間は呆れている。

5分後

「悪い」

大石が準備を済ませ、家から出て来た。

「そんなにぐっすり眠れるなんて、ずいぶん余裕なんだな。試合見て結構ビビってたって奈由未から聞いたけど？」

「ちょっと、滝田！」

本間が慌てて取り消させようとするが、もはやどうしようもない。

「うーん まあ、ビビったっちゃあビビったな。阿部は1次予選レベルだって言ってたけど、十分な守備力もあつたし、あのカウンタ―も脅威だ。でも勝てない相手じゃない。坪谷がきちんと自分の力に気付いたら、の話だけど」

「自分の力？」

石川が大石に聞くと、大石が頷いた。

「坪谷は一流のゴールキーパーになれるだけのポテンシャルを秘めてる。それに坪谷が気付けば、このチームは劇的に変わる　　攻  
撃も守備もね。この試合、あいつ次第で難易度が変わる」

「もし、気付かない時はどうするの？」

石川が大石に聞く。

「その時は　俺達が点を取る。とりあえず相手より1点多くとれば勝てるからな」

「そんな簡単に　うまくいくの？」

「うまくいってたって言うか、最終的には相手より多く点を取ってなきゃ駄目なんだから、やらなきゃ駄目なんだよ。チャレンジする前から迷ってたら、うまくいなくなる」

大石が石川に微笑みかけた。

「うん　そうだね」

石川が少し顔を赤らめながら答える。

「そろそろ行かないと、時間やばいぞ？」

滝田が時計を見ながら言う。

「うわっ、もうこんな時間！？　急がなきゃ！」

四人は急いで自転車を漕ぎ始める。

「あのさ」

石川が隣にいた大石に、小さな声で話し掛けた。

「ん、何？」

「勝ったら みんなで集まってお祝いしない？」

「そっか、このチーム、まだ1次予選突破したことなかったんだっけ そうだな。明日、みんなで集まって打ち上げしよう」

「だから、今日の試合、絶対勝ってね」

「ああ、約束する。今日の試合全力で戦って、勝って明日、皆でバカ騒ぎしよう。石川達も、サポート頼む」

「うん、任せて」

石川が力強く頷いた。

三笠高校に唐沖の面々が集まった時には、既に森山高校を応援する人々が揃い、森山高校に声援を送っていた。

もはや慣れっこになった完全アウエーの状態だ。

が、今日は久保と鶴巻以外にも、試合を見に来ている唐沖生がいた。

「珍しいな、普通の生徒が見にくるなんて」

大竹が驚いている。

「岡本達と呼んだの？」

木村が岡本に聞く。

二人きりの時とは違う、彼のいつも通りの喋り方だ。

「私達っていうか 絵実香がね」

決勝戦前々日

「え、サッカー部？」

「うん、1次予選決勝まで行ったの！ 見に来てよ！」

岡本と石川が数人の女子を誘っている。

「えゝでも あのサッカー部でしょ？ 怖そうだし」

「普通、そういうこと関係者の前で言う？」

岡本がツッコミをいれる。

「それに、どうせ負けそうだし」

「だから普通、そういうこと関係者の前で言わないでしょ!？」

「本当のことじゃん。どうせ弱小高ばっかのグループだったんでしょ？」

「違っつて、2次予選常連高も倒して――」

「私は、見に行ってもいいよ」

ツインテールの小柄な少女が言う。

「絵実香に誘われてたんだけど、ちょっと迷ってたんだ」

「ホント真鈴!？　ありがとう!」

岡本が少女を抱きしめる。

「岡本、苦しい」

「瀬恋、首に入ってるって!」

「と、まあこんなことがありまして」

「他人の首を絞めちゃった、と」

「そっち!？　いや絞めちゃったけど!」

渡辺に岡本がツツコミを入れ、笑いが起こる。

「今のでだいぶリラックスしたみたいだな」

大石が阿部に言うと阿部が頷く。

「カんでたけど、直った」

「観客もいるから、カんでもしかたない場面だけど」

木村が二人の会話に参加して来た。

「どうせなら、来てる人を感動させられる勝利が欲しいね」

阿部が頷く。

「手抜きは許されない」

「今までしてたんだ」

試合前のアップを終え、スタメンが発表される。

相手のサイド攻撃に対応するため、今日はオフENSIPミッドフィルダー——トップ下を置く、いわゆるダイヤモンド型や菱形と言われる形の4-4-2のフォーメーションとなり、右サイドバックには大島が、左サイドバックには左利きの北条が入り、センターバックには山井、小柳の二人が、セントラルミッドフィルダー——いわゆるボランチには阿部が、トップ下には大竹が入る。



それ以外はいつもと変わらず、ゴールキーパーに坪谷、右サイドハーフ藤原、左サイドハーフ丸山、フォワード永田、大石となっている。

「北条、お前左サイドバックなんてやったことあるのか？」

大石が北条に聞くと、首を横に振った。

「まあやれること、出来ることを120パーセントでやるだけだ」

北条が不敵な笑みを浮かべ、まるで何かを楽しみにしているかのような口調で答えた。

この試合にかける意気込みが、小柳や丸山のように、裏切った奴を倒す、と言うようなものでなく、ただ久しぶりにあった相手と楽しみたい、そんなふうに見える。

「北条は 漆原達のこと、許してるのか？」

北条は少し考えてから、あいつらにも理由があるんだ、と呟く。

下村が手を叩く。

ミーティングの合図だ。

「森山高校は今までとは明らかに違います。守備はシード校並の、かなり高いレベルにあります。ただ、攻める際に三つのパターンしか持っていない。カウンター、セットプレー、そしてもう一つは相手の両サイドバックの突破から生まれる、サイドアタックです。」

特に左サイドバックは日本には類を見ない、攻撃的なサイドバックです。ここを止めることがこの試合のポイントです。藤原君、大島君、お願いします」

藤原と大島が頷く。

「ゲームプランとしては前半0・0で折り返して後半、選手交代で攻撃のギアを上げて行こうと思っています。とにかくカウンターとセットプレーには注意して下さい」

試合前の最後のミーティングが終わった。

後は実際にプレーするだけだ。

唐沖の11人と森山の11人が、これまでと同様に前半40分、後半40分の試合の開始に向けピッチに散らばる。

センターサークルの中に森山のフォワードの9番と11番が入る。

主審が笛を吹き、次のステージ進出をかけた戦いが始まった。

## 攻撃対守備

森山のフォワードがボールに触り試合が始まる。

相手フォワードが下げたボールを相手ボランチの選手が相手右サイドハーフの選手にパスを出す。

相手右サイドハーフは前を向いてドリブルで進んで来る。

丸山が距離を詰めると、すぐに左サイドにサイドチェンジする。

それを左サイドハーフを追い越してきた川嶋がトラップしドリブル、大島がプレッシャーをかけに行くと、アーリークロスを入れた。

9番が小柳と競り合い、中途半端に飛び出した坪谷の後ろを狙ってヘディングでふわりと浮かせたが、ゴール脇に外れた。

前半早々ピンチを作られたが、それからは唐冲がボールを支配し始めた。

しっかりとパスを回し、相手にカウンターをさせる隙を作らず、右サイドハーフの藤原を中心に攻める。

しかし、森山はボランチとセンターバックの漆原が攻撃の中心となる大石をマンマークでびったりとくっついているため、唐冲はなかなか綺麗に攻撃の形を作れない。

漆原は背の小ささを跳躍力とタイミング、ポジショニングの良さでカバーし、大石とも互角だ。

何とかシュートまでこぎつけても、打ったシュートを全て木島に止められ、なかなかゴールを奪えない。

森山高校の応援の声を掻き消すように、ピッチ内では指示が飛ぶが、逆にベンチに座った両監督は全く動かず、選手達に任せている。

一つのミスが命取りになる、まるで我慢比べのような試合展開となる。

そのミスは前半終了5分前、一番気をつけないといけないタイミングで唐沖に出た。

阿部からのパスを藤原がトラップミスし、川嶋に奪われてしまう。

川嶋は一気に加速し、サイドを独走、対面した大島も抜き、フリーでセントリングを上げるが、精度が低く、山井がヘディングでクリアする。

相変わらず山井の空中戦の強さは際だっている。

ルーズボールを北条がクリアするが、クリアが小さく、相手の右サイドハーフが拾い、スペースに鋭いロングパスを出す。

そのスペースに、左サイドハーフ抜け出していた。

坪谷は前に出るか出ないかの判断を迷い、中途半端なポジションニングになってしまう。

相手左サイドハーフは右足に当て、坪谷の頭の上を狙う。

ボールはふわりと浮いたまま、ゴールに吸い込まれた。

前半終了5分前に気をつけていたはずのカウンターのサイドアタックで失点してしまう。

その後、唐沖は攻め込んだものの、得点が奪えず、最悪な展開のまま前半終了の笛がなってしまった。

観客席、ピッチの周りでは森山高校の応援が続いてる。

中には暴言に近い声も聞こえる。

「なんか気分悪いわ」

試合を見ていた数少ない唐沖生が呟く。

「確かに　なんかム力つくわ」

隣に座っていた少女も呟く。

試合中、応援するでもなく、ただ見ているだけではあったが、そんな彼女達にも少しの変化があったようだ。

「本間は、どう思ってるの？」

最初に発言した少女がビデオカメラで試合を撮影していた本間に聞く。

身長の低い彼女は台の上に乗って試合を撮影していた。

「外野は関係ないですから 今のチームは、何点差つけられたって逆転してくれるような期待感があるんです」

「それは、大石君が入ったから？」

真鈴が本間に尋ねる。

「それもあると思うけど 今のチームは一つでまとまってるからだと思う。昔はばらばらでチームワークなんて無かったから」

「そっか そうだよね、やっぱり」

「ねえ、私達も応援しない？」

久保が皆に言う。

唐沖を取り巻く環境も、好転しつつある。

1点負けている唐沖だが、空気は意外なほど明るかった。

その空気を作り出しているのは岡本だ。

岡本は持ち前の明るい笑顔と言葉で疲れた選手達を鼓舞する。

しかし、そんな中一人暗い表情をしている選手がいた。

坪谷だった。

「浮かない顔してるな、坪谷」

大石が隣に座り、話しかけた。

「やっぱり俺では　ダメなんす」

坪谷が大石に呟くように話し掛ける。

「　　ゴールキーパーに俺は向いてないんす。背が小さいし、手も小さい、ゴールキーパーに必要な物なんてないんす」

「んなことねえよ」

大石が坪谷を叱咤するように言う。

「確かに身長が高い方が有利だけどな、ホルヘ・カンポスみたいに身長が低くてもジャンプ力と判断力によってそれをカバーし、世界レベルのゴールキーパーとなった選手もいるんだ。お前は　ゴールキーパーに必要な技術、集中力、身長の低さをカバーするジャンプ力と判断力もある。お前に足りないものは身長じゃない、勇敢さと思い切りの良さ　つまり勇気がお前には足りないんだ」

「勇気　？」

「前半開始直後の時も、失点の時も、中途半端に前に出たからピンチを招いたんだ。前に出るならリスクを恐れず前に出ることが必要だ。迷いがあれば、余計に危険が増す。何だってそうだ。チャレン

ジする時は迷わず前に進まなきゃいけない。お前はガンガン前に飛び出せ。後ろはディフェンス陣に任せるぐらいの気持ちでいい」

「なに勝手に決めてんだ、ディフェンスをまとめるのは俺の役目だ」  
聞いていた小柳が言った。

「坪谷、お前次第だ。お前がやるなら俺達は全力でフォローする。やらないなら今まで通りだ。さあ、どうする？」

小柳は坪谷に聞いた。

「やります。フォロー、お願いします」

「だとよ、山井」

山井は静かに頷く。

「やると言った以上、徹底的にやってもらうぞ」

「はい、任せて下さい」

坪谷は力強く頷いた。

一方、森山ベンチは後半の戦い方を確認していた。

「相手は川嶋がいる左サイドを多く攻めてる。それも不自然なほどなくらい」



棚橋が発言すると、梅沢も頷いた。

「なにか企んでる気がする」

「ただ単に川嶋の裏のスペースでも狙ってるじゃない？ 相手の弱点を狙うのは常套手段だし」

漆原はそう言って、「だから川嶋は後半は攻めるのを控え目にね」と続けた。

選手達が再びピッチに姿を現す。

今度は唐沖の２トップがセンターサークル内に入る。

審判の笛がなり、後半が始まる。

唐沖は前半と同じく右サイドを中心にして攻めるが、森山はハーフタイムの話通り左サイドバックの川嶋が前半より前に上がってこなくなっていて、決定的な場面を作れない。

試合は前半より唐沖がボールを支配する、と言うよりも持たされていると言ったほうが正しいだろう。

ただ時間ばかりが過ぎて行くが、何故か唐沖の選手達に焦りはない。

森山の選手達からすれば奇妙な程、落ち着いていた。

カウンターを恐れず、ディフェンスラインを高くし、攻撃的な姿勢を貫く。

ボールを奪ったら右サイドにパスを出し、そこから攻めて行く。

それが森山の選手達にとって不気味に思えた。

ここまで徹底的に右サイドアタックをしてくると、梅沢の言う通り何か企んでいるのに違いない。

だが何を企んでいるのかが分からない。

それが不気味で、それが選手達の意識のズレを生む。

もう一点取って勝利を確実な物にしたい選手とこの一点を守りきりたい選手、考えの違いが連携ミスを生む。

だが、その中でも唐沖のピンチが生まれる。

梅沢がインターセプトしたボールを大きく前に蹴りだす。

ラインを高く保っていた唐沖のディフェンスの裏のスペースを狙われた。

足の速い相手の9番がディフェンスの裏に抜け出している。

絶対絶命のピンチを迎える。

しかし、蹴り出された瞬間に前に飛び出していた坪谷がダイレクト

で右サイドにクリアした。

森山の選手達はこのワンプレーで理解した。

坪谷のプレースタイルの変化が今の唐沖の余裕をもたらしていると。

坪谷はその後もち前前の身体能力の高さを生かして積極的に前に出てボールを処理する。

小柳も坪谷が前に出た時は後ろをカバーするために走る。

流れは唐沖に傾いて行く。

しかし、相変わらず攻めは右サイド中心の攻めだ。

森山も余裕を持って対処していく。

周りの応援も、まるで勝ちを確信したかのような応援になっていた。

残り時間30分を切った時、下村がこの試合初めてベンチから立ち上がった。

選手交代だ。

これまで右サイドアタックの中心だった藤原のフォロをこなしていた大島に代えてフォワード登録の志賀が投入される。

小柄な彼を見て、観客はざわめく。

しかしこの後、観客は別な意味でざわめくことになる。

志賀は丸山のいた左サイドハーフに入り、ゴールキーパー以外全てのポジションをこなせる丸山が右サイドバックの位置に移動する。

それが、反撃の合図だった。

小柳が相手フォワードから奪うと山井に横パスを出す。

山井が得意のロングフィードを、この試合数える程しかなかった左サイドに出す。

志賀が足元でボールをトラップし、ドリブルで突き進む。

今の彼にとって、対面する相手は人形とさほど変わらなかった。

まるでドリブル練習のようにすいすいと抜いて行く。

相手右サイドバックの棚橋を抜いた時、観客がどよめいた。

それは志賀が投入された際のどよめきとは違った。

棚橋をよく知る人間なら、あの小さな少女のような選手に、棚橋が抜かれることが信じられないのだ。

この試合、初めて棚橋が抜かれ、ようやく唐沖はチャンスを掴んだ。

志賀はすかさずセンタリングを上げ、誰かがフリーで跳ぶ。

大石だった。

今まで二人にマークを受け、殆どプレーに参加していなかった大石がいとも簡単にマークを外し、フリーでヘディングシュートを狙った。

ボールは木島の脇を抜けたが、マークを外された漆原がぎりぎりのところでクリアした。

ボールはゴールラインを越え、コーナーキックに変わる。

「今まで手え抜いてやってたのか ナメやがって」

漆原は今まで見せたことのない、怒りに支配された表情になる。

「手を抜いてたわけじゃない。前半、俺という存在を徹底的にゲームから消し、後半、ここ一番のチャンスで結果を残す。それが俺の『MAKE MIRACLE MAN』のやり方だ」

「『MAKE MIRACLE MAN』 奇跡の作り手、奇跡の男のやり方 か」

漆原の顔から怒りが消える。

「ごめんね。チャンス潰しちゃって」

「心にもないことを」

大石が苦笑する。

「でも、またチャンスはある 少なくとも一回はね。お前達は術中に嵌まってる」

「術中？」

背番号10をつけた阿部がコーナーキックを蹴ったが、梅沢にクリアされ、カウンターを仕掛けて来る。

ボールを持った左サイドバックの棚橋がドリブルで進み、志賀を抜いて先制点を奪った左サイドハーフにボールを託す。

左サイドハーフはボールを持ってつつかけたが、北条を抜けず、ボールを奪われた。

北条はすかさず山井にボールを渡し、山井が右サイドにパスを出す。

今日何度も繰り返された局面、しかし、この時は若干違った。

大石のプレーで浮足立った森山の選手は攻撃への意識が高まりすぎ、カウンターの際に選手が前に出過ぎていた。

そして山井のフィードは、今回だけ精度より威力を重視していた。

つまり、カウンターのカウンターとなり、藤原と川嶋の走力勝負となる。

本来なら藤原より川嶋の方が僅かに速かった。

しかし、唐冲が右サイドアタックを繰り返したことで川嶋は普段以上に消耗し、その体に、足に、猛烈な負担がかかっていた。

藤原が、ボールを胸でトラップし、足元に落とす。

川嶋の目には大石が二人のマークを外し、藤原のセンタリングをど  
んぴしゃで合わせる光景が見えた。

覚悟を決め、手を伸ばし藤原のユニフォームを掴んだ。

藤原は後ろから引つ張られて倒れ、笛が鳴った。

藤原を見ると、疲労からか呼吸が乱れている。

繰り返しの右サイドアタックで藤原も疲労していた。

大石の方を見ると、きつちりとマークが二人ついていた。

よく考えてみれば、ここまで疲労している藤原が精度のいいセンタ  
リングを上げるとは困難で、仮に上げたとしても二人マークを同  
時に振り切るのはいくら大石といえども容易ではない。

それに空中戦に強い梅沢もいた。

それでも相手のユニフォーム掴む、というディフェンダーとしては  
苦肉の策を選んでしまったのは、リードしてる側が感じなくていい  
はずの焦りが原因だった。

その焦りを生んだのは、間違いなく先程のプレーだった。

外見では分からないように取り繕い、藤原に手を差し延べた川嶋だ  
ったが、本心は腸が煮えくり返る思いだった。

フリーキックを蹴るのは阿部だ。

直接狙うには遠すぎるため、壁は一人しかない。

森山の選手は9番ただ一人を残し全員戻り、唐沖も丸山、大竹、坪谷以外は上がっている。

応援に熱が入る。

殆ど森山の応援で、木島コールが鳴り止まない。

だがそんな中、唐沖を応援する声が聞こえた。

本間も入れて僅かに6人、それでも彼女達の声は選手達に届いていた。

応援は、選手達の力に変わる。

審判の笛が鳴り、阿部が短い助走から蹴った。

ボールは一直線に飛んで行く。

誰よりも早く、ボールに触ったのは小柳だった。

小柳はゴールに背を向けたまま、ヘディングでボールを浮かせる。

ボールはふわりと浮き、木島は予想外の弾道に反応が遅れる。

必死に手を伸ばしたが届かず、ボールはゴールに吸い込まれた。

「っしゃあー!」



普段はクールな小柳がガッツポーズを繰り返す。

観客は静まり返る、いや、僅か6人の唐冲生は盛り上がっている。

小柳はよほど嬉しいのか、珍しく唐冲生がいる方を指差す、という気障な真似をする。

「やられたね 前半の右サイドアタックはこのための布石か」

漆原が苦虫を潰したような顔になる。

「正解。<sup>ヒンゴ</sup>それにあんたらは川嶋という攻撃パターンを失うしな」

「ただとお前らの右サイドハーフも疲弊してる。条件は一緒だ」

「どうかな 見てみな」

藤原は既にピッチの外に出ていて、代わりに木村が入っていた。

「藤原に悪いけど、藤原はこのチームにとって絶対的存在じゃないこのチームに絶対的存在はいないんだ」

「そう」

漆原はそう言うのと大石から離れ、左サイドに走って行った。

試合を再開するため、森山の選手が二人、センターサークル内に入

る。

一人は9番、そしてもう一人は川嶋だった。

スタミナの切れかかっている川嶋をフォワードとして起用し、カウ  
ンターに専念するためだ。

川嶋がいた左サイドバックには漆原が、漆原がいたセンターバック  
にはボランチが入り、とポジションをスライドした。

再開しても森山は積極的には攻めてこない。

ボールを回して唐沖ペースで進んでいた試合を落ち着かせようとする。

しかし、途中交代で元気いっぱい志賀、木村のサイドハーフと永  
田に代わって入ったポストプレーヤーの滝田、ストライカーの大石  
と4トップ気味のシステムの前に圧倒される。

森山も疲労の見えるサイドハーフとボランチを代えたが、あまり効  
果的な采配ではない。

圧倒的に攻める唐沖、その攻撃を担っているのは大竹と阿部だった。

阿部は一人でボランチとしてピッチを走り回りカバーに入り、攻め  
では相手の嫌なところにパスを出す。

大竹は体からは想像つかない体の強さを発揮し、中盤の王様として  
攻撃の指揮を振るう。<sup>タクト</sup>

完全に唐沖ペースであり、後は得点を決めるだけだった。

しかし、その得点が入らない。

さらに、時間が経つにつれ、森山がカウンターでチャンスを作るシーンも増えて来る。

どちらが勝ってもおかしくない状況の中、ロスタイムに突入した。

森山は延長覚悟のプレーとなる。

左サイドハーフへのパスが木村が一瞬触れたことでズレ、トラップミスとなりラインを割った。

スローインとなり、張り詰めていた集中の糸が切れたためか、はたまた延長を意識しているためか、ともかく森山の選手達は全力で戻ろうとはしなかった。

その隙を、丸山は見逃さなかった。

急いでボールを拾うと、下がっていた滝田に向けてスローインをする。

滝田はボールをヘッドで大竹の足元にパスを出した。

相手がボールを追い掛けてきたが、大竹は腕を上手く使ってボールを確保し、ワンバウンドしたボールをスルーパスを出した。

そこにはボールがラインを割った瞬間前に走り出した木村の姿があった。

森山の選手は疲労からか戻り切れていない。

森山のお株を奪うカウンターだ。

木村が森山の選手を引き離し、倒れ込みながらもダイレクトでセنتリングを上げた。

中に走りこんでいたのは大石だった。

大石を応援する声が微かに聞こえた。

大石は相手のマークを引き離し、木島の前で、フリーでシュートを放った。

シュートは木島に当たったが、勢いがついたボールを止められず、ゴールに突き刺さった。

ついに、逆転した。

森山の選手、応援、全てが沈黙に包まれる。

ゴールを決めた大石は僅かな唐冲生に向けて腕を突き上げるパフォーマンスを見せていたが、すぐに後ろから木村が抱き着いてきた。

選手が次々に木村の元に集まる。

既に森山に反撃する体力は残ってなかったが、誰一人諦めていなかった。

ボールを拾い、センターサークルに戻る。

試合が再開され、川嶋がドリブルで突き進む。

森山最後の攻撃を川嶋に託した。

川嶋は木村に一对一を挑む。

スピードに乗ったドリブルで一度木村を抜いた。

しかし、追い続ける木村は足をボールに当てた。

ボールがこぼれたが、川嶋が走ってボールを拾い、でたらめにセクタリングを上げた。

ボールはペナルティーエリア内に入って行く。

山井と9番が競り合い、ボールがこぼれた。

坪谷がボールを取りにいったがそれより先にオーバーラップしていた棚橋がシュートを打った。

ボールはがら空きのゴールに入る――

そのはずだった。

しかし、小柳がなんとかクリアした。

小柳は見事に坪谷との約束を果たした。

クリアと同時に審判の笛が鳴った。

試合終了を告げる笛が鳴った。

激闘が終了した。

試合終了の笛が鳴った時、唐沖のベンチは騒然としていた。

最後にセンタリングを上げた川嶋がベンチに突っ込み、なかなか立ち上がらないからだ。

「川嶋、大丈夫!？」

石川が応急処置の道具の入った箱を持って川嶋に近付く。

「大丈夫 疲れただけだ」

川嶋は起き上がろうとしたが、石川が足を掴むと、やはり痛めているのか、顔をしかめる。

「やっぱり痛めてるじゃない はい、応急処置するよ、足出して」

「相変わらず凄いな 見ただけで傷めてる場所と程度が分かるんだ」

「ただの癖だよ はい、足出して」

渋々川嶋は足を出す。

「腕と背中では打撲だから大丈夫だけど 足は捻ったでしょ」

石川は素早くて確な処置をしていく。

「お前らのやり方の方が正しかったな」

処置の間、川嶋がぼつりと呟いた。

「そんなの分かんないよ 今日勝てたのは私達だけど、去年までだったら川嶋達のやり方が正しかったでしょう？」

石川は処置をしながら答えた。

「はい、出来たよ。早めにお医者さんに行つてね」

「サンキュ じゃあな」

川嶋は立ち上がると、近くに來た棚橋の肩を借りて歩いて行く。

「川嶋達のやり方って どうゆうこと？」

岡本が石川に聞く。

「川嶋達は私達と別のやり方で鈴木先生を有名にしようとしたの。私達はこの学校を有名にして、鈴木選手のやり方を全国に伝えようとしてるけど、川嶋達はある程度有名な高校に入って活躍して全国に伝えようとしたの」

「そんなこと ! 信じられない!」

「去年、川嶋達に雑誌の取材が来たの。その時川嶋達はあの時みんなで決めた時のことを言ってたよ。『中学の時の教えが、自分達を作っている』って」

「そんな」

岡本は相当ショックのようだ。

「仕方ないよ、このことは私と木村、北条しか知らなかったんだから」

「なんで言ってくれなかったの!?!」

「川嶋達に口止めされてたの。小柳や丸山は憎む相手がいた方が力を発揮するって。実際そうでしょ。小柳は坪谷のカバーを完璧にこなして点までとったんだから」

岡本が黙ってしまった。

選手達が戻って来る。

「みんな戻って来たよ、岡本」

「うん。私の仕事だから、頑張るよ」

そう言っつて、いつもの明るい表情を作り、みんなを迎えた。

「2次予選、頑張っつてね」



ベンチに戻ろうとした大石に漆原が声をかけた。

「俺らはこんなところで立ち止まってられないんだ」

大石が真剣な表情で漆原に言う。

なぜか、そこには悲壮な覚悟が感じ取れた。

「大石君は色々大変だね。やる事が大きいと、苦労が絶えなさそうだ」

「俺のこと知ってるのか？」

「ちょこつと調べたんだ 君の過去や父親、妹のこと 君くらい有名なら現地でなくてインターネットでもわかることはあったよ。まあ君の父親のことはイギリスの友人から聞いたんだけどね」

「趣味悪いな、お前」

漆原は答える代わりに微笑む。

「じゃあね 変えてくれよ、日本を」

漆原は去って行った。

唐沖の選手達がベンチに戻ると、控えの選手達や下村に拍手で迎えられた。

下村が選手一人一人に声をかける。

「お疲れ様でした。ナイスゴールでしたよ」

大石にはそう声をかけた。

「ありがとうございます」

大石が頭を下げて礼を言う。

応援していた久保達も集まって来た。

「おめでとう、みんな」

久保が大石と喋っている時とは違う、冷静な口調で話す。

「おう、ありがとう」

北条がそっけない態度で言葉少なめに言う。

「これも俺のおかげだな」

「何もしとないよ、お前」

滝田に大竹がツッコむ。

「誰がお前にパス出したっけ」

「誰だっけ？」

「オイ！」

笑いが起きる。

いつも明るさを忘れない面々だ。

「おめでとう、大石」

応援していた真鈴が大石に声をかける。

「ああ、ありがとう。えっと」

「あかつかまりん赤塚真鈴。よろしくね」

「ああ、うん。応援ありがとう、赤塚」

「ううん、面白い試合見せてもらったから、おあいこだよ。このチーム凄いんだね。最後まで綺麗な形だったよ」

「サッカーやったことあるの？」

「あんまりやらないけど 弟がサッカーやってるんだ」

「赤塚って弟いたっけ？」

丸山が赤塚に聞いた。

「うん、学校は違うんだけど、双子の弟がいるよ」

「そうなんだ あのを、ずっと気になってたんだけど」

大石が赤塚に聞く。

「何？」

「なんでそんな鬼 郎みたいな髪型なの？」

赤塚は片側だけ目にかかるくらい伸ばし、逆は目にかからないようにしている。

「そこで聞くか、普通？」

大竹がツツコむ。

「なんでお前鬼 郎知ってるんだ？」

丸山が大石に尋ねる。

「父親の実家が鳥取だから」

「おしゃれのつもりだったんだけど 変かな？」

「いや、可愛いよ」

大石が笑いかけると赤塚の頬が少し赤らむ。

（さすがイギリス育ち）

（照れがないね、褒めに）

阿部と大竹が脳内で感心する。

そのやり取りを石川が複雑そうな顔で見ている。

「嫉妬してるの？」

「そんなんじゃないよ！」

「はいはい」

「本当に違うからね!？」

「はいはい」

岡本はまるで相手にしていない。

「水飲んで来るね、ちょっと」

大竹が空になったボトルを置いて歩き始める。

「あ、俺も」

「俺も」

大石と木村が大竹を追いかけて走って行った。

「何もなければいいけど」

石川が心配そうに言う。

「何が？」

岡本が大竹の置いていった空のボトルを拾いながら聞く。

「ここ、三笠高でしょう？」

「そうだよ ああ、そういうこと」

大竹達3人は水飲み場を探していた。

「なかなか見つからないね」

「もう校舎の中入ったほうが早くないか？」

三人が話していると、前に学生服を来た男がいた。

「あの人に聞いてみようか」

木村が男に近付いていくと、こちらに気付いたのか振り向いた。

「ん？ あれ？」

大石が大竹と見比べる。

「顔が一緒」

「兄貴だよ、そいつ」

大竹が答える。

「久しぶりだな美園、相変わらずモヤシだなあ、おい。ちゃんと食ってんのか？」

「うるせえよ脳筋」

会うなり口喧嘩が始まる。

「仲悪いのか？」

「さあね」

大石と木村がひそひそ話し合う。

「あの男もサッカーやってるのか？」

「うん、県内では有名な人だよ。神奈川の四強の一つ、三笠高校のキャプテン大竹英美さんおあたけひでみ。暴走機関車と呼ばれるサイドハーフ」

「暴走機関車、ねえ」

「体格の良さと抜群のスピードがウリ」

「そゆこと」

英美が会話に入ってきた。

「試合見せてもらったよ。『MAKE MIRACLE MAN』」

つつうちからのオファー断った男がどんな奴か見てみたかったからな。あんただろ、大石未華瑠って」

英美は大石の方を向いて言う。

大石が頷くと英美はため息をついた。

「勿体ないと思わなかったのか？ こんな奴らとやってたらお前の才能は枯れるぜ？ せつかく天才に生まれたんだ、有効に使わなきゃ勿体ないだろ？」

英美がにやけながら大石に話し続けた。

「それって、質問？ それなら答えるまでもないことばかりだけど」

「あ？」

「別に俺は自分が天才だなんて思ったことなんかないよ。ヨーロッパには俺くらいの選手はごろごろいたからね。イングランドには俺は必要ない、だから俺は日本に来たんだ。あんた達の学校よりも、他の学校よりも、こいつらは俺を必要としていた。だからこの学校に来たんだ。それだけの話だよ」

「だとしても、だ。そいつらじゃお前を活かしてくれやしない」

「なら俺が活かしてやればいいだけだよ。弱小を強豪にして行くのが面白いんだろ？俺はこいつらと全国優勝する」

「言っつのはタダだからな」



「俺はサッカーのことについては嘘をつかない」

大石が微笑む。

「そうかい　なら、楽しみにしてるよ」

英美はそう言い残し、3人に背を向け去っていった。

「あ、水道どこにあるか聞くの忘れてた」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0817h/>

---

ピッチに降り立つキセキ

2010年10月9日11時38分発行